

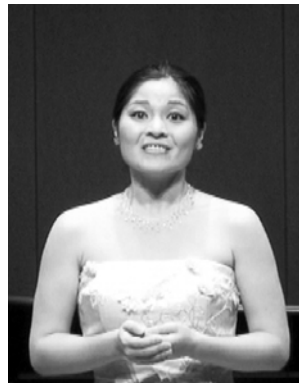
CMDJ 2012 オペラコンサート ～愛の表と裏～



開場前にみんなで撮影（ヴァイオリンの栗津惇氏のみ外出中だったため写っていない）



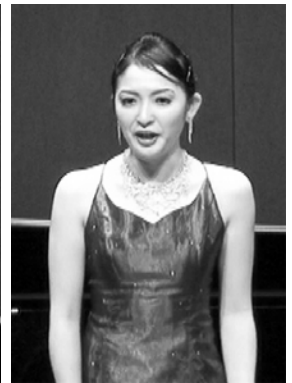
司会の佐藤光政氏



“宝石の歌”を歌う
北風紘子さん



“美しく優しい君”
を歌う岡田真実さん



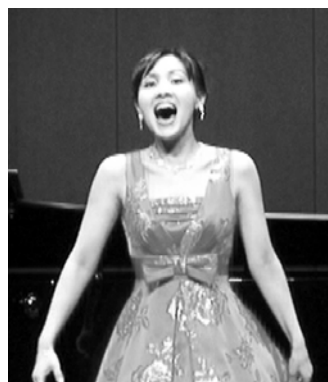
『マンノ』のARIA
を歌う秋山来実さん



“秘密の抜け穴から”
を歌う高橋順子さん



“お客を呼ぶのが好
き”を歌う鈴木望さん



“侯爵様…”を歌う
今井梨紗子さん



“人知れぬ涙”を歌う
テノールの高柳圭氏

～愛の表と裏 後半『地獄のオルフェ』～



後半開始 左: 司会の佐藤光政氏
右: ピアノの亀井奈緒美さん



最初のアリアを歌う
ユリディス



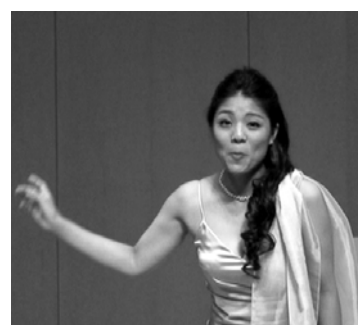
ヴァイオリンの演奏が入る二重唱
左: 粟津惇氏とオルフェ、ユリディス



オルフェを威嚇する世論 (二重唱)



デュアヌとジュピテル



ジュピテルをからかうヴェニユス



訴える
オルフェ



私は王様だったと
歌うJ. スティクス



J. スティクス (左) と
ユリディス (右)



キューピドン (左) と
ジュピテル (右)



雷に驚きユリディスを振り返るオルフェ



地獄のギャロップを踊る女神たちとユリディス

音楽の世界

目次

グラビア	CMDJ2012 オペラコンサート『愛の表と裏』		
論壇	モノ文化と音楽、芸術	小西 徹郎	4
特集	最近の音楽界の現象・出来事		
	チェコの小さな音楽事情		
	～クロメルジーシュの現代音楽祭を中心に～	中嶋 恒雄	6
	現代音楽見聞記 (17) 特別編	西 耕一	13
	守り育てる音楽、音楽を取り巻く環境	小西 徹郎	16
	最近の音楽界の現象や音楽環境と、不易の存在	橘川 琢	20
長期連載			
	音・雑記一ひなの里通信一 (51)	狭間 壮	22
	名曲喫茶の片隅から (32)	宮本 英世	24
	音盤奇譚 (37)	板倉 重雄	26
	私とラジオ・ドラマ (4)	助川 敏弥	28
	CMDJ2012 オペラコンサート『愛の表と裏』		
	制作現場からの報告	実行委員長	30
音楽会評	愛の表と裏	助川 敏弥	34
訃報	伝説のヴァイオリニスト諏訪根自子逝去		35
書評	松村禎三「作曲家の言葉」／アフリカに暮らして	助川 敏弥他	36
短期連載			
	福島日記(13)	小西 徹郎	38
	◆コンサート・プログラム◆～様々な音の風景～IX		40
コンサート・リポート	『オーケストラ・トリプティーク 弦楽による奏楽堂の響き』		49
	《会員の活動紹介》		50
	CMDJ 会と会員の情報		52

音楽というものがこれほどに環境の変化に物質的価値が左右されるとは幼少時代には思いもよらなかった。カセットテープ、レコードからCD、そしてダウンロードと音楽、いや、録音芸術というもののメディアの変化は物質として小さくなりその小さくなった分価値まで下がるという現象がおきてもう何年経ただろうか？今、映像も音楽もデザインも文章もコンピュータの中に収まってしまうものはお金として価値がなくなってしまう。

私は考える、おそらく人間がもっとフィジカルなものを求めていく動きは3～40年先にならないと出てこない。その根拠はハードの変化によるだろう。まずデスクトップパソコンは消滅し、その次にノートパソコンが消滅し、タブレットタイプの端末になる。どこにいても音楽やデザイン、映像が編集できる環境になるだろう。そしてソフトウェアは価値がなくなりタブレット端末の付属品になるだろう。そしてタブレットタイプ端末は現在のiPhoneのような形になり更に簡略化されるだろう。そしてコンピュータというものは「メガネ」のような形になり、眼球の動きでコピー&ペーストやクリック&ドラッグができるようになり、音楽制作やデザインが「手を使わない作業」でできるようになるだろう。このことは脳内のものをダイレクトに表現できるのでは？という期待もあるかもしれないが、あくまで人からアウトプットされたものなので脳内をダイレクトに表現ということには結びつかないだろう。こうなっていくのに、いや、こうなってそれが社会に浸透するまでに3～40年はかかる。そしてその間芸術家たちはメディアや技術とフィジカルな表現のはざまでもがき苦しむだろう。そして40年後、物質を追い求めてきながら利便簡便をも求めてきた人間がやっと、フィジカルな表現の大切さに気がつくのだろう。私はそのように考えている。

モノ文化。以前から音楽において疑問と意識を持ち続けてきた。たとえば、よくあるのが予算組みをする際に機材や会場や印刷など「モノにかかるお金」「価格が明記されているモノ」あるいは設備を動かすための「人件費」などについては最初に固定費的予算が組まれる。ところがいつも最後に「余剰金」の中から申し訳程度に報酬部分が予算に入り込む。余剰金がなければ予算は組まれない。何故クリエイションがまず最初に予算組みされないのだろうか？そのことを不思議に思うとともに悔しく思う。その姿勢において、「クリエイションは作者の自由」という観点か

らそこに価値を見出せないのかもしれないと感じるほどである。なのにコンサートなどの公演については「主役」はクリエーション、つまり作品である。だが、そこには予算は優先して組まれることは中小の公演においてはとても少ないと感じるのである。観客や鑑賞者が求めるクオリティとは機材や会場や宣伝媒体だけではなく作品、またパフォーマンスの質の高さが最も重要であるにもかかわらずそのことは予算の組み方に反映されにくいのだ。

音楽という空気。手にとることができない、香りを感じることもできない、空気の振動である「音」という存在。そして膨大な振動の情報量を大幅に圧縮し閉じ込めることに成功した録音芸術というカテゴリー。そこから音という存在はカセットテープからレコード、そしてデジタル化されてCD、と手に取ることができるかのようになった。その時に音楽産業の仕組みは大きく変わり、そこに今現在の「価値観」が生まれた。そしてコンピュータの発達とともに音はダウンロードになり、手に取れなくなってしまいとても小さなものへと「体積」を変えることができるようになってしまった。軽くなった体積の音に馴れてしまった人間はそこに満足してしまい、コンサートに出かけるという贅沢で豊かともいえる時間を過ごすことを日常から取り去ってしまった。テクノロジーの変化に環境が変わり今現在その価値について多くの音楽会社は苦心している。何故そうってしまったのか？それは「音楽」を「豊かに」届けていくことを「音楽」を「探す、発掘」しようとしてこなかったことが原因のように感じる。音楽という心にとって大切なものですら利便性、簡便性を重視した結果が今の音楽業界を苦しい状態に追い込んでしまったことにつながるだろう。そして前述のとおり、これから先3~40年の間、芸術家、特に音楽や文芸、或いはグラフィックデザイン、映像、これらの分野の芸術家はメディアと創作のはざままで苦しんでいくだろう。簡便、利便が行き着くところまで行ってしまってからまたフィジカルなものへと回帰していくのだろう。そして、今を生きている私たちがすべきことはどんなにメディアテクノロジーが大きく変化しようとも、心に響く音楽を作り、演奏し、それを根気強く社会に届けていくことをやめないことである。その積み重ねが未来へのプレゼントになるのだ。そして今こそ、本当に心に響く音楽とは何なのか？が試されているのである。

(こにし てつろう 本会理事)

特集:最近の音楽界の現象・出来事(1)

チェコの小さな音楽事情

—クロメルジーシュの現代音楽祭を中心に—

作曲 中嶋恒雄

1. まえがき

本年6月にソプラノの家内とともにチェコのプラハ、ドマジュリツェ、フラデツ・クラロヴェ、クロメルジーシュの4ヶ処を巡って演奏旅行をした。プログラムは私の歌曲作品を中心にして、幾つかの日本歌曲とともに、同行したピアニストの独奏曲もジョイントにし、処に応じて入れ替えながら演奏した。これはチェコの音楽事情のささやかな報告である。

ご存知のようにヨーロッパの中央にあるチェコは、わが国からは直行の飛行便も無い小さな国である。したがって一部の旅行マニアや識者、商社、生産会社関係者など以外は、ほとんどの日本人が漠然とした知識を持つのみであろう。音楽関係者であれば、それはスメタナ、ドヴォルザークの名前と音楽である。私自身も今回3度目のチェコ訪問をするまで、ドマジュリツェ、フラデツ・クラロヴェ、クロメルジーシュというような街は、名前さえ聞いた事も無く、まったく知識も持たずにチェコのピアニスト、グロスネロヴァー・ユリア大梶の言うままについて行っただけであった。し

かしクロメルジーシュの現代音楽祭に参加し、現地の音楽家や、音楽に触れ、彼らの音楽に対する真摯さ、私の音楽への理解度の高さを知ることによって、彼らのことをもっと良く知り、お互いに交流することは私たちの音楽のあり方のためにも重要だと気がついて、この報告をする次第である。今日、わが国は、韓国や中国との領土問題で急に騒がしくなった。しかしチェコの事情を多少でも知ってくると、日

音楽現代

2012年10月号 定価 840円

♪特集＝「エリーザベト・フルトヴェングラー101歳の少女／フルトヴェングラー夫妻、愛の往復書簡」刊行記念、今、改めてフルトヴェングラーの人間と音楽を考える。

特別対談 宇野功芳×野口剛夫

♪特別企画＝アニヴァーサリーな音楽家たち Vol.7～9
スビャトスラフ・リヒテル、ナタン・ミルシテイン、キルステン・フラグスタート

♪カラー口絵

・パシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF) 2012

・読売日本交響楽団創立50周年特別公演

「世界平和への祈り～広島・長崎特別演奏会」

♪インタビュー

戸田弥生、エレナ・アシュケナージ、瀧井敬子 他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159

本人はまだまだ、あまりにも呑気過ぎると思わざるを得ない。チェコの知識人の生きて行くモットーは、「黄金より自由を」というものである。ここには彼らの歴史への無限の想いが込められている。私の無調と有調を行き来する様式の音楽は、音楽の非常に自由なあり方を示すものとして、彼らの耳に評価されたようだ。家内が私の作品の演奏を終えて万雷の拍手の中を控え室に戻ってくると、作曲家や演奏家の大男たちが次々と、まるで王妃さまに敬意を表するかのよう、家内の手を取って腰を屈め、キスをしたのには驚かされた。また楽屋の女性たちも次々に家内の身体を肩から抱きしめ、お目出度うを慣れない英語や良く分からないチェコ語で言ってくれた。このようなことは、私たち日本の中で演奏しているだけでは絶対に起こりえないし、慣習的に理解し難いことであるので、チェコ人が音楽をどのようなものとして考えているのか、その背景を探ってみよう。

2. チェコ共和国小史



私が1ヶ月滞在したプラハ郊外の家具付きペンションの外観。この建物は14世紀に建てられ、領主の館であった。日本のホテルよりずっと安い値段で借りられる。

チェコは、人口が1000万ちょっと、国土も日本の5分の1ほどの小さな国である。第1次大戦以後チェコとスロヴァキアは統一国家であったが、1993年に分離独立した。地図を見ればすぐに分かるが、すぐ西側にドイツ、南にオーストリア、北東部のポーランド、そしてさらに東にロシアと地続きに国境を接している。ということは、日本の竹島、尖閣諸島、北方領土以上に、紛争と支配と略奪の苦難の歴史を抱えた国だということである。

しかしチェコの首都プラハには、京都と同じように第2次世界大戦の戦火を潜って

古い建物がそのままに残されている。これがドイツからも、ロシア（ソ連）からも爆撃にさらされなかった事情は、アメリカの爆撃を受けずに済んだ京都以上に複雑である。プラハを観光する多くの人が訪れる第一の場所は、プラハの街を東西に分断して流れるヴルタヴァ川に架けられたカレル橋である。この橋に名前を残したカレルとは、14世紀プラハの発展に尽くした、神聖ローマ皇帝カレル4世である。彼の母がチェコの国を創設した家系であるために、父方はドイツの名門貴族であるにもかかわらず、彼は神聖ローマ皇帝となっても、チェコ人としての意識を持ち続けたと云われ、チェコ人から「祖国の父」と崇められている。

ドイツとチェコの関係は、今日にも尾を引く厄介な問題を抱えている。カレル4世の先祖プシェミスル家の君主たちは、ハンガリーのマジャール人のチェコ（ボヘ

ミア) への侵入を防ぐために、ドイツ王であり神聖ローマ皇帝でもある皇帝の封臣となって、チェコは神聖ローマ帝国の1領域になった。

しかしこの事実が、カレルの後に神聖ローマ皇帝の地位を独占したハプスブルク家や、ヒットラーの支配を許す遠因となっている。特にハプスブルクの支配は、17世紀のビーラー・ホラの戦いの結果としてより強められ、チェコのドイツ化が進み、チェコ語やチェコ文化の衰退が始まったのであるが、1784年、ヨーゼフ2世の公用語をドイツ語にするという言語令によって、チェコの文



ペンションの窓越しに見られるのどかな風景。

化、言語の衰退は極まったといえる。また、すでに13世紀には収入増を図って、有利な条件でドイツから多数の植民者をチェコに呼び寄せたこと、ビーラー・ホラの戦いの原因の1つであった多数のドイツ人官吏の登用は、チェコ国内にドイツ人が多数住む地域が形成されたことによって、今日のドイツとチェコの緊張関係の大きな原因となっている。

第2次大戦の後チェコは共産圏の国になった。これにも大きな事情がある。1938年の英仏独伊の4ヶ国首脳会議ではチェコを参加させないままに、ドイツ人の多く住む地域のヒットラードイツへの割譲を決定したこと、またこの決定に異議を唱えたのがソ連だけであり、さらにソ連は、ドイツの占領下にあったチェコを解放したことによって、当然のようにチェコ国民の期待はソ連に向かった。そこで反ナチの為に戦った国民戦線政府、次いで共産党の政治体制が生まれたのである。この戦後最初の国民戦線政府は、250万とも300万とも云われるチェコ内に住むドイツ人をすべて、チェコから追放した。しかし1992年、チェコとドイツはナチスのチェコ支配によるドイツの責任、この結果によるドイツ人追放という集団的罪のチェコの責任を双方が認め合い和解して、チェコはEUに加盟した。しかしこれらドイツ人たちへの個人補償問題が未解決なために、現在でも、ユーロ通貨を公式通貨として使用出来ない原因になっている。さて、さかのぼって米ソの冷戦が始まる1947年に、ソ連は東欧諸国のソ連圏組み入れを意図し始め、チェコの「人間の顔をした社会主義」という独立路線は、ソ連軍のチェコ侵入によって、党首脳部が拉致され、あっけなく挫折させられた。それでも1991年にソビエト連邦の共産体制が解体すると、チェコとスロヴァキアの分離という代償を払いながらも、ようやく今日の民主的な体制になったのである。

3. クロメルジーシュ現代音楽祭2012

上のように他からの受難が常態とも云えるチェコの人々は、18世紀後半の民族復興運動の時代に活動したバラッキーの「我々が自らの精神と民族の精神を。隣人たちよりも高貴な活動へと高めなければ、我々は諸民族の間で名誉ある地位を得ることができないばかりか、ついには、自らの自然的生存さえも守ることが出来なくなるであろう」（石川達夫『プラハ歴史散策』 講談社2004）という、精神と文化の高揚こそが、小民族の生きる道であるという教えを、一人ひとりが実践しているように思える。クロメルジーシュは、チェコの東南部にある世界遺産の街である。この街は、17世紀の30年戦争の最後にスウェーデン軍によって2年の間占領され、またペストの流行によってほとんど破壊され尽くしていた。



スメタナ博物館前にあるスメタナ像と共に。
前の訪問では、ここで私の作品が演奏された。

しかし、ハプスブルクの領封君主リヒテンシュタイン家からチャールズ2世が司教としてこの街にやって来ると、ただちに街は再建されて、今日の姿になったのである。そして戦後、この豪華な建物と庭園をチェコ政府が接收したために、この音楽祭などの民間の企画が、演奏会場として使用することが可能になった。このクロメルジーシュの現代音楽祭は、正確にはFestival Forfest Czech Republicと題され、精神の方向づけをする現代芸術国際フェスティバルと副題がつけられている。このForfestはラテン語のForumとFestumからの造語であり、みんなのフェスティバルを意味している。この音楽祭はすでに40年以上も継続されており、今日では、クロメルジーシュの

市のみならず、近郊の5都市を横断し、絵画やメディアアートなどの他分野の活動をも巻き込みながら、6月の1ヶ月間開催されている。音楽祭を推進するリーダーは、ヴァークラヴ・ヴァクロヴィツジ、ズザンカ・ヴァクロヴィツジの画家とヴァイオリニストの夫妻である。彼らはあの冷戦下の辛い時代から手づくりでこのフェスティバルを立ち上げ、現在は、地方自治体、国の機関、チェコとスロヴァキアの放送局、ユネスコ、ガウデアムス基金などの応援を取りつけて運営している。

私の作品は6月23日に演奏されたが、その日は、後半に私の作品が置かれ、前半は、主催メンバーであるヤン・グロスマンの歌曲とチェコの前より若い世代の作曲家の、ヴィオラのための作品が演奏された。私たちの夕5時からの、ロシア皇帝とウィーンの皇帝が会談したという豪華な大広間での演奏会が終わり、続いて夜8時からすぐ側の古い教会で、隣町の立派な腕の弦楽4重奏団がチェコの作曲家の作品を

4曲演奏し終わると、すでに時計は夜の10時を廻っていた。ヴァークラヴがそれからお茶に招待したいというので、疲れてはいたが仕方なくついて行くと、何とこれが彼らの自宅で、この時初めて私は、このもの静かに演奏会場の雑用をやったり、カメラマンをしていた彼こそが、まさに主催者であり、画家であることに気がついたのであった。彼はこのフェスティヴァルについて、次のように述べている。「狭い地域での地域的な限界や商業的な利益が創造的な芸術のもつメッセージを覆い尽くそうとする現在の工業化社会において、これを守るただ1つの方法は、国際的な芸術組織である。私は、今日のグローバル社会での芸術の役割を、このフェスティヴァル通して探求したい」。要するに彼らチェコの芸術家たちは、戦後の長い米ソ冷戦の影響のもとで、国どうしの行き来を禁じられ、芸術的交流の阻害された状況を政治



世界遺産の街クロメルジーシュでの演奏会。
写真は私の作品を歌う妻啓子。

の力ではなく、芸術の力で乗り越えようとしているのである。

しかしもちろん彼は、ここで展示される芸術が、決して多くの大衆に呼びかけるものではなく、少数の選ばれたもののみ呼びかけるものであることを知っている。1ヶ月に渡るフェスティヴァルのプログラムは、チェコ及びスロヴァキアの音楽家によるものが大半であるが、イスラエル、イタリー、クロアチア、スウェーデン、ドイツ、そして私たち日本からも音楽家が参加して作られており、主催者側にとっても、訪問者側にとっても、十分に興味深いものであった。また彼らの演奏水準は非常に高く、他のヨーロッパの水準に比べても決して劣らないものであったと思う。

グロスマンは、10年以上以前に私の曲の伴奏者ユリア大梶のアカデミー修了演奏会での私のピアノ作品を聴いて興味を持ち、以後、彼の教



チェコの作曲家
ヤン・グロスマン教授とともに。

える大学で私の作品を楽曲分析の教材にしていると語った。だからあなたは、チェコでは有名なのだとも。私自身、現代の日本において作曲することがどれほどの意味を持つかと、つねに自問自答してきた。

けれどもこのような事実に出会うと、もっと広い目で、音楽のあり方を考えなければいけなかったと反省させられる。グロスマンや他のチェコ作曲家たちの作風について述べると、しっかりした伝統的な技術の上に、静かな祈りや宗教的な精神性を表現しようとする傾向が聞き取れる。これはさきのバラッキーの教訓を、彼等が身に沁みて意識し、作曲しているからなのだと思う。



クロメルジーシュの演奏会場になった、17世紀に建てられた司教の館。

4. ドマジュリツェの演奏会及び私たちの課題



クロメルジーシュの街角に貼られているフェスティバルのポスター。

ドマジュリツェはプラハの東南に位置する小さな街で、古くからビールで有名なプルゼニ（ピルゼン）を通してドイツのレーゲンスベルクへ抜ける、街道の街として栄えた。ここでも街のたたずまいは古いままに残されており、今日では多くの観光客が訪れる街として知られている。この街では「夏の文化祭」という催しが毎年行われており、20以上もある企画の中に私たちの演奏会は、「日本の夕べJaponsky Vecer」として、6月17日に組み込まれていた。街のあちらこちらに私たちの演奏会のポスターが貼られてあり、会場は街のコンセルヴァトワールの1室であった。

しかしこの会場は、高い天井に立派な天井画の描かれているのは良いとしても、カーテンのない窓から日暮れの遅い夕日が差し込むのと、たった1台しかないというグランドピアノが打ち合わせが悪かったために他の部屋で使われており、アプライトで演奏しなければならなかったことには閉口した。それでも聴衆は十分な期待を持って聞いてくれ、大きな反応を得たことは、私たちにとっても喜びであった。

コンセルヴァトワールを辞するとき、主催側で私たちの世話をしてくれた婦人が、「今日は素晴らしい演奏をありがとう。これは私のお返しです」といってきれいに装丁された本をくれた。宿に帰って開けてみると、これは彼女のスケッチ帳で、改めて彼女もまた、画家であったことを知っ

たのであった。また、遅い夕食に訪れたレストランの主人が、「あなたたちは日本人だろう、今日の演奏会をみんな楽しみにしていたよ」と云われたのにも、びっくりさせられた。

さて、以上の体験の上での私たちの会へのささやかな提案である。私たちの会にも多くの優れた演奏家、練達の作曲家が所属している。そして多くの演奏会を定期的に主催しているのであるが、聴衆の動員、社会へのインパクトという点では必ずしも十分とは云えない。私の日比谷高校時代の同級生で旧大蔵省高官、駐米公使などを勤めた友人がいる。彼は役員を勤めているオペラシティの切符以外はすべて切符を買って、毎晩欠かさずに音楽会に通っている。彼はそれらの情報を毎晩の音楽会で配布される膨大なチラシから得るのである。



ドマジュリツェでの演奏会場になったコンセルヴァトワールの部屋とその天井画。

シから得るのである。

この友人のようなコンサート通いの音楽好きは、世にはまだまだ沢山いる。私たちの会がさまざまな工夫をしていることは理解しているが、情報を会員だけにではなく、このような音楽好きの目を惹くために、さらなる工夫はできないだろうか。たとえば会の情報を伝える手段として、会に所属する一人ひとりの音楽会員の持つ個人的支持者のリストを、私たちの会でまとめて収集、管理し、共通な情報として会のすべての主催、後援活動を彼らに伝える方法は如何であろうか。さらに、公共自治体、他の団体への働きかけや国際交流も大事な課題であろう。これもたとえば草の根レベルにおいて、韓国や中国、ロシアなどの問題のある国との政治抜きでの音楽交流はできないものか。このような音楽が存在できる基本的な課題について、私たちの会の中で十分に議論のできる機会を持つことを心から希望するようになったことが、私のささやかなチェコでの体験の結果である。会員外の本誌の読者も、ぜひ、アドヴァイスを編集部へ寄せてくださることをお願いしたいと思う。

(なかじま・つねお 本会作曲会員)



私たちの世話をしてくれたヤナ・フルシュコヴァさんが描いた、ドマジュリツェの街のスケッチ。

たことが、私のささやかなチェコでの体験の結果である。会員外の本誌の読者も、ぜひ、アドヴァイスを編集部へ寄せてくださることをお願いしたいと思う。

現代音楽見聞記（17）特別編

～2012年5、6、7月～ 音楽評論 西 耕一

現代音楽の「今」というお題、いろいろと書きたいことはあったが、時差の開いてしまった見聞記を3ヶ月分綴りながら今について思索を巡らす形としたい。

5月2日、東京フィル創立100周年特別演奏会は150人編成のボレロ！輝かしき日であった。6日、筆者の企画選曲司会「奏楽堂の響き4」。同シリーズは、日本の音楽界を築いた先人への敬意と共に、演奏会用作品という枠で考えることなく、映画・機会音楽であっても名曲を次世代へ、と継続するもの。今回は「日本の作曲家の様々な仕事を楽しむ」として、知られざる名曲・誰もが知るのに演奏されない名曲の発掘・復元・編曲、新作委嘱を行い、4つの特集「日本のラジオ・テレビ音楽」「3人の会の仕事」「現代の作曲家」「北海道の作曲家」でお届け致した。開演は黛敏郎の天地創造で荘厳に。同じく黛NNNニューステーマや石原裕次郎主演の栄光への5000キロも取り上げ、プチ黛特集は会場を沸かせた。懐かしい記憶が甦る深井史郎の日本テレビの鳩の休日、ドリフ大爆笑で知られるたかしまあきひこの瞬間の美学FNNニューステーマは普段、存在を認識されずにいた音楽へ光を当てようというもの。池辺晋一郎の爽やかなMBS毎日放送も評判が良かった。放送黎明期の信時潔のジングル曲。芥川也寸志は、健全・快活とリリズムの表裏をみつばちマーチと八甲田山で披露。團伊玖磨は新祝典の前年の傑作おやさと大行進曲を取り上げた。アニメ「フラクタル」の鮮烈なイメージが記憶に残る鹿野草平の新作も日本の作曲史を踏まえ、新しい言葉を紡ぎ出そうというもの。伊福部昭の「北海道讃歌」（佐藤光政独唱）とわんぱく王子のおろち退治よりや、北海道の生んだもう一人の映画作曲家・佐藤勝の映画から組曲として取り上げた札幌オリンピックも舞台初演！3人の会、石原裕次郎、札幌オリンピック、八甲田山、大阪万博、北海道讃歌、みつばちマーヤ…。1960～70年代、日本がエネルギーに溢れていたあの時代の音楽で元気を取り戻そうという趣旨は、コンサート後に頂いた多くの感想からもある程度果たせたと思う。7日、作曲家三木稔 追悼・箏作品コンサートIは、「箏譚詩集」を中心に吉村七重、木村玲子、山田明美、宮越圭子が演奏。すみだトリフォニー小は満員となり、作品の持つ力を間近に体験できた。10日、日本音楽舞踊会議の作曲部会作品展にてロクリアン正岡の「サクソフォーン八重奏曲来音」を聴いて、この作曲家の新境地と出会えた感慨深し。重厚でエネルギーを発散する男性美は正岡の持ち味であろう。13日、プロアマ混合の混声合唱団「空」定期演奏会がJTアフィニスにて。湯浅譲二の声のためのプロジェクションが馬蹄系に配置した声楽による立体音響を見事にリアライズしており感嘆。その後、トロッタの会へ。今井重幸の伊

福部昭讚「狂想的変容」が白眉。舞踊付きの上演であり、舞踊監修は金井芙三枝・坂本秀子による。疾風の如くステージに舞い降り、プロメテの火を掲げた小倉藍歌のしなやかな体技は特筆すべきもので音楽の持つ生命力とも絶妙な時間を構成していた。それにしても他の曲も加え10曲、力作揃いであった。殆どが初演であるため宝くじのような気分でないで聴きに行くのさえ一苦勞になる。これは現代音楽関連の多くのコンサートについて言えるが、出品料を割り勘にするため多くの参加者を募る。各自の出費を減らすためなのはわかるが、一晩に10曲を聴くのはなかなか辛い。また出品曲に規定時間がある場合、作曲側にも陥りやすい罠がある。それは規定時間ギリギリで作曲しようというもの。せっかくだからギリギリまで書こうと作曲するから冗漫な部分や画一的表現が増える。アンデパンダン展では曲数よりも合計時間を考えて構成すべきでなかろうか。15日、武蔵野音大出身の作曲家グループ「色葉」作品展。朴炳五の電子音響、洋楽器、マリimba、韓国打楽器の混在アンサンブルで曼荼羅を描くような力強い音楽。18日、VnとpfのROSCOが若手作曲グループinの企画に参加。Vnを手術して分解するように演奏する田村修平曲や体操の動きがそのまま音楽になるような今村俊博曲など、どこかで誰かがやっているアイデアだが、それを作曲の技術で如何に形作るかであろう。23日、東フィルのオペラ「アルファとオメガ」日本初演。作曲はイスラエル人ショハット。ムンクの絵をスクリーンに映し、イメージを掻き立てるシンプルな演出が活きた。24日、コンポーザー細川俊夫個展は近年の管弦楽曲と笙ソロであった。心の陰影を投影するような抒情的世界であったと筆者は思う。27日、武満賞は1位をガルデッラとアンゲラキスで2位なしの3位が日本人、木村真人と薄井史織。木村の淡雪の如き弦楽の美、薄井のグロテスクな音響美ともに健闘していた。31日、Opus-medium spring. vol. 2。菅野由弘の光の粒子ーピアノと南部鈴のためのには驚いた。南部鈴をリンリンと鳴らしながらピアノを弾くのであるが、特徴的な鉄の音が耳に自然とエフェクトをかけるのである。つまり、鉄の響きによって耳がプリペアドされる。その耳で同時に演奏されるピアノを聴くと普段と違って聴こえるというもの。これは非常に新鮮な発見であった。

6月は1日、藝大21 創造の杜でヴォルフガング・リーム生誕60年記念の夕べ。Vnと管弦楽の第3の音楽、ソプラノと管弦楽のための獵区の2曲。前者はVnソロに打楽器やアコーディオンの音色も絡む。後者は引用やパロディも聴こえるモノオペラ。いずれも日本初演であるが、リームの傑作特集でない理由は何だろう。3日、東フィルが面白い企画をした。外山雄三の指揮するラプソディ特集。リスト、エネスク、ガーシュイン、リムスキー=コルサコフ、シャブリエ、そして外山。天晴れな企画であったと思う。9日、女声合唱団コール・ジューンの松村禎三暁の讃歌。この合唱団は混声の曲も女声に編曲して伊福部昭、松村禎三らの曲をレパートリー化しようと活動している。11日、クットロ・ピアチェーリはショスタコフの第13番と

日本と海外の旧作を取り上げる。委嘱新作でなく旧作から現代曲を取り上げる理由に足るクオリティーの演奏であったのは菅野由弘の弦楽四重奏曲。16日、三木稔の弦楽合奏曲 Spring for Strings を音名オーケストラで聴く。24日、アンサンブル・ノマド定期#44は結成15周年記念。3時間を超える演目でゆかりある曲と独自路線、そして南米モノ、現代音楽アンサンブルとしてのノマドを満喫した。27日、モルゴーア・クアルテットも20周年でプログレッシブ・ロックをSQに編曲演奏する夕べ。浜離宮ホールは前売り券で完売。イエス、ピンクフロイド、キング・クリムゾン、ELP。ある意味で熱いエネルギーを失っていった現代音楽のミッシングリンク埋める作業だったのかもしれない。レパートリー化を望む。29日、N響 MUSIC TOMORROW はジェームズ・マクミラン指揮で今年度尾高賞の尾高惇忠の交響曲。法倉雅紀の委嘱初演、リンドベルイ曲、マクミランのVn協奏曲など。尾高賞と委嘱は別として、海外2曲は明日の音楽とは程遠い。もう少し、企画・選曲者から練るべきだろう。

7月4日は、N響団員50年を迎えた外山雄三を讃える夕べ。外山に加え、広上淳一、中村紘子、池辺晋一郎、檀ふみというメンバー。ノールショピング交響楽団のためのプレリュード、ピアノ協奏曲、管弦楽のためのラブソディー、交響曲「帰国」という演目で作曲家であり指揮者外山の面に光を当てる好企画。6日、東京シンフォニエッタ 第31回定期ラジオ・フランス ウィーク・エンド パリー日本より。7日、芸大21 芸大とあそぼう「ジョン・ケージ生誕100年 現代音楽なんかこわくない」はプリペアード・ピアノと室内管弦楽のための協奏曲他。藝大のピアノでもプリペアードができる！10日、東日本大震災チャリティ演奏会 ～『ヒバリ』から曲を集めて～。Fl、Vn、pf、のトリオからソロまでの編成で配信のために作られた新曲を舞台初演。山本和智のクリナメンでは、ピアノのボディをこする奏法が印象深い。11日、邦楽創造集団 オーラJ 第28回定期“三木稔メモリアルシリーズ” Vol. 1 三木稔が日本楽器へ託したものは、三年続く三木追悼シリーズの第1回目。紀尾井小が満員になる盛況。13日、日本音楽集団定期。1973年に生まれた二つの傑作伊福部昭の郢曲鬢多々良と三木稔のダンスコンセルタント第1番四季。この頃の現代邦楽界の熱気を思う。14日、日本フィル・シリーズ再演企画として、同シリーズ委嘱作より戸田邦雄合奏協奏曲シ・ファ・ド、山本直純和楽器と管弦楽のためのカプリチオ、黛敏郎弦楽のためのエッセイ、松村禎三交響曲を下野竜也で再演。山本の破天荒な精神に宿る職人の技術は大いに喝采を浴びて良い。和楽器入りの春祭がブルースになったり、労働歌になったり、先の読めないハチャメチャぶりが堂に入っていた。松村の交響曲は堅牢な構築物としての存在感に加え、大乘仏教的温かさを醸し出していた。

(にし・こういち 音楽評論)

守り育てる音楽、音楽を取り巻く環境

作曲 小西 徹郎

音楽界を取り巻く環境の変化は著しい、過去の成功例はもう既に未来への手本、バイブルにはなりえないだろう。音楽がモノからファイルになってモノ文化から脱することができないものは単価ダウンの影響により経営、運営の大きな妨げとなっている。だが、その中で業界も単価ダウンを補うための策は講じられている。それは常に新作と新人と新カテゴリーを探し投入していくことである。以前は業界に問題があるかと感じていたが、実はそうではなく、クリエイター側に問題の根源があることに気がついた。業界への不平不満をもらしてしまうその根源はクリエイターたちが変化への対応ができていないことのあらわれなのかもしれない。それは新たな波やトレンドをクリエイターたちが起こさないことが結局不平不満へとつながっていることになっているのだ。以前、テレビ、メディア、コマーシャル業界で大活躍をしていた友人と久しぶりに再会した。その彼はこれほどに大きな仕事を実績として積み上げながらも今現在はほとんど仕事がない。他のアルバイトをしなければ生活できないほど困窮していた。その彼から出てくる言葉は「仕事がないねえ…」である。仕事がない、イコール仕事を生み出そうとしていないのだ。音楽を作っていて、仕事をとってくるコーディネーターがいて、仕事があるときはよかったが今は昔のスタンスのまま生きているため新たな波に乗り遅れてしまったのだ。そういう現実が自分自身の周りでも多くあるのだ。だからクリエイターたちは新たなクリエイションを打ち立てていかななくてはならない。そのためには専門家育成のための教育プログラムから練り直す必要があるだろう。そして同時に鑑賞者を育てることも重要である。そして、制作者、創作する者、表現する者、それぞれ自身が作品を作る手法や技法におぼれることなく、鑑賞能力、審美眼を持つために鍛えていくことが大いに必要である。つまり鑑賞者と同じ、それ以上の鑑賞能力を持つことが芸術家の大きな必須となるということである。鑑賞者、創作者、それぞれが互いに対等でなければ芸術は社会に浸透していかないのだ。

今何故こんなに音楽の現場が厳しいのか？その中で私は営業のためも兼ねて映像制作会社のリサーチをした。たくさん存在する映像制作会社の中で何とも残念なことがあった。ある会社は公式ホームページでこう謳っている。

「当社は著作権フリーの音源素材を使用いたしております、音楽にかかるコストを削減することができます」

これがこの会社の特徴である。大手放送局の番組制作も行っているこの会社、私は思った。クリエイションとは何なのか？クリエイションはどこに消え去ったのか？モノ作りをする、モノ作りの精神はどこに消え去ってしまったのか？私は愕然としたのだ。そして映像制作会社の求人についても調査した。実情は「企画、営業、販売、デザイン、そして映像の制作の流れからリリースまですべて一人でできる人以外は必要ありません」こうである。「私はここが得意で誰にも負けません」これがもう既に通用しないのが現実なのだ。そう考えると教育の現場と実社会との意識の温度差をととても感じてしまう。

では、音楽側の人たちは今のこの単価ダウン、仕事量のダウンについてどう考えているのか？たとえば音楽大学に入学してきて研鑽を積み卒業していく。1年間に全国で音楽大学、専門学校を卒業する若者が何人いるのか？そのうち何人がプロとして生き残れるのか？そんなことを考えていると恐ろしくなってくる。実際に卒業したばかりの若者にインタビューをしてみた。仕事は一切ない、との答えに対し、「自分で企画をして売り込みをかけたり、クラシックにこだわらないのなら自分でDTMを使用して音源を作ってバイオグラフィと一緒に売り込んでみるとか、そういうことは考えてない？」ときくとまったくやったことがなくてまったく思い浮かばなかったようだった。これが現実である。そしてこんなに音楽の価値が「下げられて」しまっていて、それでもクリエイターサイドはレコード会社に持ち込んで売り込んでメジャーデビューを目指す、ということに鵜呑みにして進んでいる。今芸術家の「雇用契約」は恐ろしく手薄い。今はアーティスト契約ではなく楽曲契約がほとんどであり、特に「音楽そのもの」で勝負をかけている者たちはアーティスト契約に至ることが少ない（特にヨーロッパ方面、自分自身の環境において）。ではどうやってレコード会社と契約を結ぶのか？レコード会社と契約を結べば万々歳で食っていけるのか？そこを考えないアーティスト、クリエイターたちは常にレコード会社の「在庫」として経営を圧迫してしまう。ならばどうすればよいのか？まず、レコード会社の経営に参加すること、或いは営業に企画に参加し、契約した場合の労働分配率をみる。そして本当に契約をするのなら利益率（売り上げと経常利益の金額を把握したうえで）をみて契約のパーセンテージを会社側と議論をする。そこまでやらなければならないだろう。メジャーがアーティストを抱えるとは非常に重たいことなのだ。

■林拓というアーティスト

音楽の価値とはいったい何なのだろう？今は今の音楽がありそれは太古からの積み重ねであることは変えようのない事実である。まだ録音技術が発展途上だった頃の音楽を聴いていると当時の空気、本来ある空気はわからずとも録音の手触りから時代を感じることができる。もう40年前50年前の音楽はリアルタイムで耳にすることができないのだ。つまり、厳格なる普遍とはありえないのだ。そんな中、ありえないほどの奇跡が目の前でおきた。それが「林拓」というアーティストだ。

フィジカルなものを大切に今から考え直し進めていかないといずれアートは死んでしまうだろう。人はアートを死に追いやってしまうのだ。こんなことを思いながら「林拓」というアーティストのライブに行った。林拓は友人で音楽評論家でプロデューサー、ユリシーズ主宰(シンコーミュージック・エンタテイメント)の河添 剛氏が今最も力を入れているアーティストだ。ちなみにここで河添氏の紹介を。2008年に京都のKENZOのプレスパーティで出会ったパリのアーティスト Guillaume Leingre 氏の紹介で私は河添氏と出会った。そこから親交が深まり私は河添氏が推奨する音楽やアート、そして彼のアートに対する思考や考え方、そして厳しくも人間味にあふれた純真さに惹かれていった。河添氏はシンコーミュージック・エンタテイメントから出ている「ユリシーズ」という音楽雑誌の編集の責任者でもある。そんな河添氏が力を入れている「林拓」というアーティストは京都の人だ。今年の夏、デビューアルバム「オデュッセイア」を『ユリシーズ』を通じてリリースした。

私は1968年生まれた。60年代に生まれてはいるが、物心ついて音楽に興味を持ち始めたときは80年代に突入していた。60年代のロックやフォークを私は実際に生で聴いたことがなかった。それはそうだろう、私は60年代ロックやフォークの時代には生まれてもいなかったし、物心もついていなかった。そして今、40年以上が過ぎてこの林拓の音楽に触れたとき私の脳内には60年代の古い映像、擦り切れたようなサウンド、そういうものが目の前にくっきりと現れた、そんな新鮮な気持ちになっていた。私は林拓のライブをみて短いがライブ評を書いた。

「音楽で自由になることと、人が音楽を自由にするを同時にみた。僕らが生まれて物心ついたときにはもう既に生で聴く事ができなかった音楽、それを今日初めて僕は生で聴く事ができた、まさに林拓は“申し子”である。その純真さゆえに、はかなく浮かぶ音楽はまるで風に揺られる一輪の花のようだ。そしてその一輪の花を愛でるように薄らいだ笑みが走る。時代は彼というアーティストを殺してはならない、そう感じた。」

簡便や利便を追いかけて破綻してからフィジカルなものが表に出てこようとしても時すでに遅しであり、今を生きているアーティストは今はとても厳しい時代ではあるが何とか生き残る術を考えてほしいし生きていけるような環境を作り守っていくことが大切だ。そのことがこの先の未来の音楽をアートを「守る」ことにつながっていくだろう。

■時代の変化と対応すべきことと守るべきもの。

まず、クリエイターたちは時代に流されず、絶えず「打ち出し方」に変化をつけて生きていくべきである。だが、「打ち出し方」と「作品」や「表現」は次元が異なる。クリエイター、アーティストたちは作品の「質感」や「表現」の骨子は変え

てはならない。何故ならそれはアーティストとしての自身と人間としての自身、つまり作品や表現はその人そのものだからだ。人はアーティスト、クリエイターの生き様を注意深くみている。そのことは歴史が既に証明している。「普遍」という言葉を漠然と信じることなく、注意深く注意深く時代をみていくことがアーティスト、クリエイターにとって必須であるだろう。そして音楽という側面だけを見つめることなく、音楽で芸術でアートをどうやって社会に貢献していくのか？そして浸透していくのか？アーティスト、クリエイターたちの生活の糧としていくのか？そのことをしっかり見つめる必要があるだろう。そうすれば必然的に何が足りないのかがわかるだろう。そうすれば自身で企画をたてるであろうし自身で営業をするであろうし、プレゼンテーションもできるようになるであろうし、数字にも強くなれるであろう。経営感覚を備えたアーティストが必要とされているのだ。そしてまた大切なことは「創作」と「打ち出し方（生き抜くための戦略）」を混同しないことである。混同してしまうのは「自意識」が足りないということだ。ということはアーティストにあらず、といえるだろう。今を生きているのだ、という自覚と自覚が揺るがないための大地にしっかりと立ち尽くすための足、立ち位置、そこから今を歩んでいく、力強く歩んでいくことこそが「純真さ」であり最も重要なことであるのだ。

■自分自身のことについて。

今までは私が多くの素晴らしいアーティスト様とご一緒させていただくことでよい積み上げをしてきたのだが、もちろんそれを継続しながらも、おこがましいのだが私と活動することによって周りがステイタスになっていく、そうありがたい。そのために守るものは守るし変えるものは変えるし、昇るときは昇る。そして私は不平不満を言ったりある意味の自己保身をする必要がない。何故なら評価は自分ではなく第三者に任せてあるからだ。答えを自分の中に見つけようとするならば「自分」という「人間」を「やめる」必要がある。そこまでできない人間が「自分」を尊重する。私は自分を自分で評価しない。導かれるところにいって自分を発揮するだけである。これはよく間違い勘違いされるのが「何でも器用にやる」と思われがちであるが、そうではない。自分のアートをやって評価されるかされないか？次につながるかつながらないか？ここは私自身がどんなにあがいてもどうすることもできないであろう。第三者に評価を任せることが「逃げ」と考えることもできるだろう。でも、考えてみてほしい、もし評価もされずつながりもしない、ということはアートを仕事にすることができないのだ。死ぬ気でないとできないことだと思うのだ。これから先、アーティストとして必要とされるのならば私は行き続けたい。不要であると烙印を押されるまで。或いは人生を終えるまで。

(こにし・てつろう 本会理事)

最近の音楽界の現象や音楽環境と、不易の存在 ～特集の総括として～

作曲 橘川 琢

今、我々が音楽に主体的に触れる機会が多い。特に、ネットが発達したここ15年程の利便化・簡便化は、大変な変化をもたらした。

先日ネットを見ていたら、twitter（世界的なつぶやきサイト）で、あるアーティストの少し先の新譜リリース情報が発信され、そのメッセージが引用拡散されて流れて来た。紹介されている先をのぞくと、一ヶ月先の音楽のサンプルが、それぞれ、1分半ほどの紹介版ではあるが全曲試聴できる。気に入ったら、Amazon（ネット上の通販）で、パソコンの前を動かさずすぐに予約注文できる。欲しいと思った衝動に、すぐ応えてくれる。

友人が書いているネット上の日記（ブログ等）を読んでいたら、友人のライブ映像がYoutubeやニコニコ動画（ともに、自由に自作動画投稿が出来る場所）に上がっているという。さっそく見てみると、なるほど、洒落た舞台衣装に身を包んだ友の姿を見られる。ああ、緊張してるな、変わらぬクセがあるなど、懐かしい姿に安心感を覚えたりする。

さらに、投稿された動画が数年前のものであれば、相当数の感想、レスポンスがある。世界的なサイトとなれば、意見や感想の言語も多種多様。一つの投稿動画に数カ国語の感想が付いている。中には歴史的な演奏家の実演姿が見られたりして、その希少性に驚く事もある。日本語中心の動画サイトでは、まるで今一緒に見ているような気持ち、高揚感、共感、ライブ感さえある。特にこの十数年間の技術革新とともに、バーチャルはバーチャルで、表現手段における、ある魅力的な環境を構築してきた。

それに比べ今回特集で挙げられたことは、場所・環境の違いはあれども、発信側も受け取り側も、どちらも音楽に触れるために相当な時間も手間も、そして費用もかけなければならないことばかりである。主催者も準備に多くの時間を使い、公演に大きなリスクを背負う。そして作る側、クリエイター側の環境についても、多くの人にとって特に経済的に日々苦しい立場で続けざるを得ない現実がある。演奏会を開くにも、宣伝や広報、集客も決して楽な事ではない。聴衆も、その日のその時間のために予定に入れ、当日会場へ時間と交通費等をかけて移動する。夜の公演の後打ち上げに誘われたりしたならば、遅い時間までつきあうこともあるだろう。

教育現場や音楽のレッスンに至っては、たいへん長い期間、音楽を通して子どもや学生と接する。時に音楽教育を通じて人格の陶冶（とうや）をはかることもあり、

常に全人的な関わりを求められる。子どもなら成長期の大切な時期の多くを。大人ならごく限られた余暇の時間の中での選択。一時的な音楽体験だけでは済まされない。

こうしてみると、単に音楽だけに触れることに比べ、「音楽と人」との間に音楽体験以外の事に付属することが、何と多くある事か。音楽の聴取だけであれば、前述のように便利になった。これだけ手軽に音楽に触れられる時代、なぜ、時間を使い、費用を払い、こうまでして生の音楽に触れようとするのか。

「今の音楽界」のみで言うのなら、人と音楽の距離に関しては、需要側も供給側も前述のように情報のみの習得はどんどん短縮され、時間も手間も、効率化できるようになった。日々その恩恵に浴している身としては、その存在を否定しないし否定できない。むしろ30分・1時間を惜しむ忙しい日々の中、距離や時間、時に希少性という壁を短縮してすぐに聴きたい音楽にアクセスできる多くの機会や環境に感謝している。

しかし、それでも私は、労を惜しまず演奏会に行く。

それは音楽の向こうにいる、人に、直に触れたいからだ。音楽という、人の肉声を全身で聴きたからだ。演奏会に集う、友人や同好の士と会いたいからだ。演奏会という贅沢な時間がこの慌ただしい今の世にも存在し、この形式が続いているのは、生音の魅力を感じたいという多くの人の欲求とともに、同じ空気を今ここで味わいたい、息吹を感じたい、音楽を愛するまさにその人を見たいという多くの人の気持ちが支えているからではないだろうか。そう考えると、得られるものとは音楽だけではない。

生の音楽体験とは、同じ時を共有するという、時間・・・命の交歓である。寿命という点から見れば、厳然たる「命の尺度」の一つとして時間がある。一生の限られた時間の中で、その時その場のために企画をする人・舞台に立つ人・受け取る人が共に時間という命を、まさに同時に差し出して成立させる時間の重ね合いであり、生の音楽会、音楽体験というのは、目の前で命のやり取りそのものである。

人生の聖なる一回性の中、同時代を、同じ空間をともに生きるもの同士、ともに差し出し合った時間の分だけ互いの存在に近くなる。「いつでもどこでも」というのは、「今だけ、ここだけ」という命を共有し合う人間同士の交流や交歓に取って代わることはない。その関係に、新しいも古いもない。

音楽は音響であると同時に、常に人間の声である。伝えたい生（せい）の声である。それは過去の音楽界であれ、今の音楽界であれ、そしてまだ見ぬ未来の音楽界であれ、不易のものである。

音楽とは人間が在る限り続く、命の永遠の対話であると信じて止まない。

(きつかわ・みがく 本誌副編集長)



節電への本気度を試されるような猛暑の夏が終った。只今、チンチロリンの秋。チンチロリンといえばマツムシの鳴き声ということになっている。残念ながら、私はその声を聞いたことがない。その姿も見えない。

それでもチンチロリンのマツムシには、文部省唱歌「虫のこえ」で出合っている。この中では、スズムシやクツワムシ、ウマオイほかも登場し「秋の夜長を鳴き通す、あゝおもしろや虫の声」などと愛(め)でられるのだ。

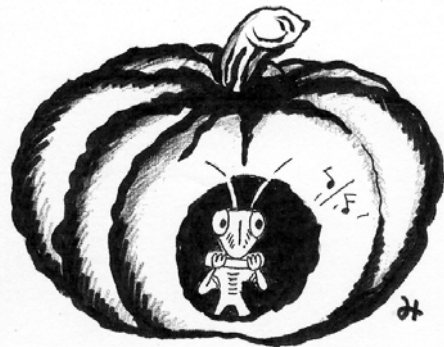
小学生なら、身近な虫の名とその鳴き声を知っていて欲しい、の「教育的配慮」から作られた教材だ。

この「虫のこえ」、コンサートで季節の歌としてプログラムに入れることがある。皆さんも！と呼びかければ、保育園児など特にはりきり、「ガチャガチャ ガチャガチャ クツワムシ」など、一段と声を張りあげそのかまびすしいこと、まさに騒音。明治の「教育的配慮」今なお健在なのだ。

騒音といえば、アメリカ人は虫の声を騒音、雑音としか解さない、と聞くことがあるが、必ずしもそうではない、と「大人になった虫とり少年・宮沢輝夫著」の中で詩人のアーサー・ビナード氏は言う。

鳴き声を楽しむ人もいるのだが、アルファベットの26文字の範囲で表記するのが難しく、表記を試みたとしても、それが思うように共通の音としては伝わらない、というのだ。それが虫の声の擬声語を作るさいの手かせ足かせになってしまう、ということらしい。

「Chirp (チャープ)」とか「Trill (トリル)」とセミの声を表記することがある、という。しかしその擬声語からでは、私にはその姿が思いうかばない。全てのセミが、この2つの鳴き方でくくられてしまっただけでは、おそらく多くの方はセミをはじめ鳴く虫への興味もそがれ、愛着もわきにくいのではないだろうか。



虫ごとの擬声、擬音の表現の豊かさは、日本語の多様な表記によるところが大なのだ。となれば、鳴く虫の鑑賞という文化を育んできた日本語という言語に、私は感動してしまう。文部省唱歌「虫のこえ」が誕生したのも、そしてその果たす役割もとても大きいのだ。

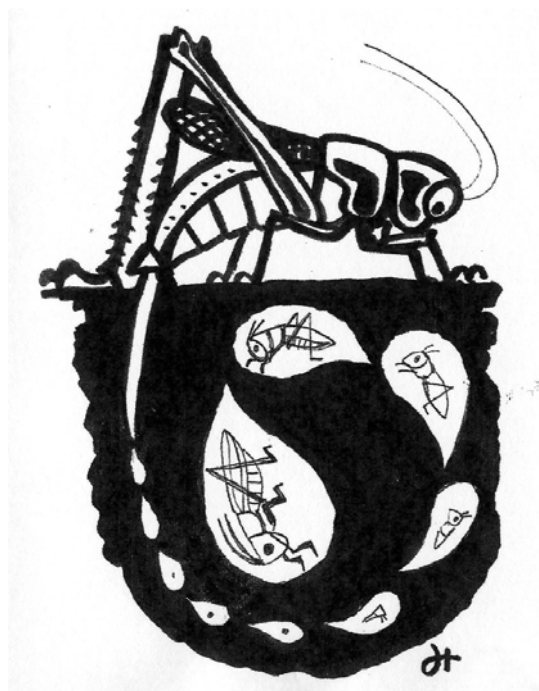
詩人・立原道造に、「のちのおもひに」という一編がある。中村太郎によって美しい抒情歌曲になっている。日本歌曲の魅力に目を開かれるきっかけとなった曲だ。次はその断章。

夢はいつもかへって行った
山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない
しずまりかへった午さがりの林道を

「草ひばり」が気になって、鳥類図鑑で探した。遂に見つからず、いつしかあれやこれやと想像するだけの幻の鳥になってしまっていた。

空にさえざる草ひばり、実は虫！だった。俳句歳時記の中で見つけた。あらためて確かめてみると、並の国語辞典の中にもいたではないか！鳥だとの思いこみで、調べを終えてしまっていたのだった。虫好きの少年タケシ君（私）としては、なんとも不甲斐ない。そして未だにこの空ではなく、草地に鳴くクサヒバリとの出会いはない。声も聞いていない。コオロギ科のちいさい虫で、フィリリリ、フィリリリと鳴くという。その声、あたかも小さな鈴を震わせたような澄んだ声なのだとか。俳句の秋の季語になっている。聞いてみたい。

庭のすみに、からたちを3本植えた。白秋や耕筈にならい、からたちのそばで泣いてみたかった、のではない。アゲハ蝶の幼虫の食草なのだ。



「アゲハがたくさん来てる！卵をうみつけてる」と庭の草とりの手を休め、家人が報せてくれた。季節（とき）を知り、約束したようにやってくるアゲハたち。卵はやがて幼虫になり、からたちを裸木にするごとくに食べ尽した後、さなぎの中で眠りにつく。

体内の時計にうながされて目を覚まし、羽化して庭のあちこちから飛びたつころ、信州にも遅い春が来る。小さな庭に、虫たちの確かないのちの営みがくりかえされていく。

今は秋。わが家の庭では3種類ほどのコオロギの声の饗宴が続いている。聞きながら眠りにつく。秋の夜ならではのぜいたくである。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 32 回〕 誕生日と命日が同じ、という 2 人の作曲家

音楽会や盛り場に出かけると、「なんとまあ、多くの人間が！」と圧倒されることがある。ほとんどが見知らぬ他人というわけだが、こんな時ふと考えるのは、一体私たちは、生涯にどの位の人たちと知り合うのだろうか？である。もちろん住む場所・職業・生き方などによって人それぞれに違うわけだが、多いように見えて案外そうでもなく、せいぜい数百人から数千人くらい。親密さの度合いによっては、数十人以下なんていう人が多いのではなかろうか。大勢の中からそういう人に出逢うのは、だから確率的にいったかなり低く、いわゆる“縁がある”とか“運命の糸で結ばれている”というのかも知れない。

出逢うといえば、同姓・同年令・同郷・同窓などという人にぶつかると、初対面でも何となく親しみが沸くものである、それだけでなく、じつは名前も同じ（つまり同姓同名）だった、誕生日も同じだった、隣に住んでいたんですよ、なんてことになったら、それこそふしぎな偶然にびっくりさせられるに違いない。残念ながらそういうことはめったに起らないから、もしぶつかったとしたら、印象的な出来事としていつまでも記憶されるだろう。

作曲家の生年・没年というのを眺めてみると、例えば音楽史に画期的な業績を残した大物が同じ年に生まれている偶然—— J.S. バッハとヘンデルと D. スカルラッティ（1685 年）、シューマンとショパン（1810 年）、ヴェルディとワーグナー（1813 年）とか。あるいは性格が似かよった作曲家た

ちが、おなじ干支（えと）の生まれだった——バッハとベートーヴェンの「寅」、ドヴォルザークとシベリウスの「丑」など——といった事実気づく人は多いかもしれない。

ならばもう一つ、生・没年と寿命は違うけれど、生まれた日と死んだ日の両方が同じ、という 2 人の作曲家がいるのを、あなたのご存知でしょうか。これこそはめったにない、音楽史上でも珍しい例なのである。



ヨハン・シュトラウスⅡ世

その 2 人とは、“ワルツ王”として名高いオーストリアの作曲家ヨハン・シュトラウス 2 世（1825～99）と、オペラ「カルメン」で知られるフランスの作曲家ジョルジュ・ビゼー（1838～75）のことである。

J. シュトラウスが生まれたのは、イギリスで世界最初の鉄道が開通した 1825 年の 10 月 25 日、ウィーンである。父親も同名のヨハンで、この人はヨーゼフ・ランナーとともにウィンナ・ワルツの基礎をつくった、といわれる人物。ランナーと別れ、独立してオーケストラを作った少し前に長男であるヨハンが生まれたのである。父親は彼が音楽家になることには反対だったが、そこは蛙の子は蛙。内緒でピアノを勉強し、さらにはヴァイオリンも巧みに弾くようになって、いつの間にか一人前の音楽家になってしまったのだった。何しろ売れっ子だった父親は、子供の面倒を見る間もなく、演奏会や旅に明け暮れ、母親に任せきりの教育。それでいて絶対に音楽をやらせるなど厳命したのであったから、無理が生じたのは当たり前、とうとうそれが原因で両親は離婚までしているのである。

父の生前に早くも楽団を作った彼は、父の楽団と張り合うほどになったが、1849 年に父が亡くなると、それからは独壇場、よく知られるように、ヨーロッパ中をワルツで席卷したのだった。

一方、J. シュトラウスよりきっかり 13 年後、1838 年の 10 月 25 日にパリの声楽教師の家庭に生まれたのがビゼー。音楽的環境に恵まれたせいもあって、パリ音楽院へは何と 9 才で入学。神童サン＝サーンスでさえ 13 才の入学であるから、大変な才能である。

ピアノの腕前ではかのリストに匹敵するといわれた彼だったが、しかし作曲家とし

て選んだのはオペラの道。生涯に約 30 作のオペラを書くものの、成功しその名を残したのが、死ぬ直前の「カルメン」だけというのは、いかにも不運な人である。



ジョルジュ・ビゼー

さて、そんな二人が亡くなったのは、ともに 6 月 3 日。シュトラウスは 1899 年、ウィーンにおいて、73 才。一方ビゼーは 1875 年、パリ郊外のブーヅヴァルにおいて、36 才。先輩シュトラウスが、後輩ビゼーの 2 倍を生きたことになる。彼らが生まれた 10 月 25 日は、チャイコフスキーの「ピアノ協奏曲第 1 番」や、ブラームスの「交響曲第 4 番」が初演された日。亡くなった 6 月 3 日は、モーツァルトの作品を整理したルードヴィヒ・ケツヘルルの命日でもあった。

【宮本英世氏プロフィール】 1937 年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲 100 選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



【連載】

音盤奇譚

板倉 重雄

第 37 回

ワーグナーの舞台神聖祭典劇《パルジファル》

2012年9月13日から17日に行われた二期会《パルジファル》公演は、私にとって極めて重要な音楽体験となった。歌手陣、管弦楽、演出と全てに高水準の公演だったが、その第一の立役者は指揮者の飯守泰次郎氏だろう。ワーグナー自身が書いた



た台本は宗教的な内容を持ち、かつ様々な意味に取れる無限の含蓄を含んでおり、音楽は非常に内省的で、調性もあいまいで、劇の内容を更に深める効果をもっている。飯守氏は今の俊敏な指揮者たちとは全く違う、昔のドイツ風の音を長く保つスタイルで表現した。その結果、音楽はゆったりと息づき、ロマンティックで情緒豊かなものとなった。華やかさの中に翳りがあり、強さの中に弱さがあるような表現が《パルジファル》に何と相応しかったことか！

実は10年前の2002年4月27日、飯守氏はHMV渋谷でトーク・イベントを行っている。私は飯守氏がピアノを弾きながら《トリスタン》や《パルジファル》を解説されるのを聴いて目を見開かされる思いだった。ピアノによるテーマ演奏も、二期会での指揮同様、非常に長く音を保っていたのが印象的だったし、次の言葉も深く胸に刻まれた。

「カラヤンは《パルジファル》で空気のように漂う美しいピアノニッシモを聴かせたが、ヴァイオリンにさらに弱く美しい音を要求した。日本人の細い指の方が相応しいのではないかと、思うくらいの」

思えばカラヤンは巨匠クナッパースツブッシュの練習に潜り込んでワーグナー演奏の奥義を学んだし、飯守はそのカラヤンのリハーサルに接し、かつ長年バイロイト音楽祭の助手を務めている。東京文化会館に「本物のワーグナー」が鳴り響いたのは当然だった。

人間の心の弱さ、導かれたときの胸の高揚、そして思考停止の群集心理…こうした人間の本質が不変であることを《パルジファル》は問いかけているし、その事が演奏によって強く胸に迫ってくる見事な公演だった。

●ワーグナー：舞台神聖祭典劇《パルジファル》全曲（写真 前ページ）

ハンス・クナッパーツブッシュ指揮バイロイト祝祭管弦楽団、同合唱団、ほか
[フィリップス SFL7793～7]（LP5 枚組）

1962年、バイロイト音楽祭でのライブ録音。クナッパーツブッシュ（1888～1965）は、戦後バイロイト音楽祭が再開された1951年から1964年まで《パルジファル》の指揮を担当。「バイロイトの守護神」と呼ばれた。このレコードは1964年レコード・アカデミー大賞を獲得した名盤。1967年、二期会が《パルジファル》を日本初演した際の対訳本の裏表紙に、このレコードの広告が印刷されている。

●ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲

ピーナ・カルミレリ（ヴァイオリン）

飯守泰次郎指揮カペラ・クラシカ

[独 SASTRUPHON SM007050]（LP）

1973年録音。飯守泰次郎（1940～）がバイロイト音楽祭音楽助手を務め始めた頃の録音。2002年に飯守氏に直接話を伺ったところ、カペラ・クラシカというオケは録音用の臨時編成だったとのこと。イ・ムジチ合奏団のリーダーを務めたイタリアの名女流カルミレリ

（1914～93）の、艶やかに歌い抜くヴァイオリンを、瑞々しい響きと、ゆったりとした進行、柔らかなデュナーミクで支えている。



.....

【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



私と、ラジオ・ドラマ

連載第4回

作曲 助川 敏弥

ラジオ・ドラマの話からそれるが、ついでに前回の話の続きを書いておく。こういう分野で働く音楽家の仕事ぶりについて知ってほしいからである。

ファンファーレと社旗の映像のタイミングが合わなくて大汗かいた話。この指揮者君は前回書いたように、本来はある楽器の奏者であり、都内の大手交響楽団の団員である。

この日は、映画の録音以前に本業の楽団の練習が入っていた。この楽団の練習所は、小田急沿線、郊外の新聞社所有の遊園地内にある。都心からはかなり遠い。一方、映画の録音の場所は「銀座スタジオ」、通称「銀スタ」。場所は東銀座の高速道路沿い。かつての中央区民センターがあった所から晴海通りよりの所である。いまはもうない。高速道路の「対岸」が電通の本社であった。

楽団の練習所から銀スタまではかなりの距離である。ところが、この日、楽壇の練習が予定より長びいた。スタジオでは、演奏者も、技術者も、電通の担当者も待機している。指揮者君から電話が来た。「練習が長びいたので少し遅れる」と。電車の経路としては、銀スタは地下鉄日比谷線の東銀座である。小田急からここまでどういう経路で来るのか。下北沢で井の頭線に乗り換え、渋谷で地下鉄銀座線、銀座で日比谷線、こういう乗り継ぎをしなければならぬ。乗換駅を通過するたびに電話が来る。「いま××通過中・・・」。携帯電話がない時代だから公衆電話である。そのたびに、待つ方は、はらはらしたり、憔悴したり。少し安心したり。そうして、かなりの遅刻の後に彼氏は転がり込んできた。その挙げ句の果てに、最後の映像と時間が合わない。本人も憔悴していたろうし、迷惑をかけた自責の上で録音がうまくいかないのだから最悪の心境であったろう。こういう場合、電通担当者の機嫌を害することが一番こわい。やとわれる身である。担当者は無口で無表情の人だった。しかし機嫌がわるいことは当然である。その後、この指揮者君と電通はどうなったか知らない。途中からタクシーに乗ればより早く着いたかもしれないが、そうしない理由の一つは、渋滞に入ると電車より遅くなること。もう一つはタクシー料金を節約したいことである。生活のための仕事はこういうものである。もっとも、この指揮者君はいたって楽天的で、暗澹たる表情ではまったくなかった。そうでなければこの分野の仕事はできない。

ついでに、もう一つ似た件、これはNHKの仕事だったが、やはり、同じ楽団の人でViolinが二人、練習が長引いて遅刻すると電話が来た。NHKは小田急の代々木八幡だから、前の話より交通は便利である。皆が待っているうちに二人は大汗かいて飛び込んできた。さほどの遅刻ではなかった。こんなに長引いた練習は何の曲だったのか、誰かがきいた。答えは、「知らない」。「表紙見なかった」。プロとはそういうものである。何の曲か知らないでひいている。しかし音は責任もって出す。それがプロというものである。あきれたような話だが、こういう職人氣質を私は好きである。音楽についての文学的関心などは毛頭ない。

前の話だが、電通が指揮者を決めるわけではない。電通からの仕事を映画音楽の事務所が受ける。事務所が、作曲家、演奏者を決めて手配する。しかし、おおもとの電通から、「この前のようなことはないように」、と言われれば、気にしないわけにはいかないし、言われなくとも事務所としては顧客の声は気にするものである。

ここで、この分野の仕事の発注経路を説明しておく。NHKの場合である。

まず、放送担当者から作曲者に仕事が来る。内容の打ち合わせは先に書いた。演奏者をどうするか。NHKには「アンサンブル××」と称する録音演奏団体が多数存在する。このスタジオ「楽団」は代表者がNHKに申告登録するものらしい。らしいというのは、私も確かめたわけではないからである。代表者は演奏者一人分の報酬を受ける。したがって、もし代表者が自身演奏者でもあれば二人分の報酬を得るわけである。この団体は仕事の時だけ集められるわけだから仮装団体みたいなものだが、人材は次第に固定してくる。私の場合は、代表者(インスペクターということになるか)は芸大同期のハープ奏者の女性であった。この種の団体は数あるから、どこに依頼するかは作曲者次第であるが、人間関係の経緯で次第に固定してくる。私の場合は、絃は読売交響楽団の上席の人たちだった。そして、演奏者の人選には作曲者に発言権がある。××を呼んでほしい、××はこの場合適当ではない、などという話もする。代表者はその意にしたがい呼びかけ、「××はこの日先約がありむずかしい」とか、「かわりに誰それはどうか」などの話になる。かくして、人選は決まり、当日は、その人たちがスタジオに揃うという次第である。演奏者たちの水準はこの国での最上のものである。名の知れたソロ奏者もいる。読響のフルート野口龍君、N響の打楽器の岡田知之君なども常連であった。

(すけがわ・としゃ 本会 代表理事)

CMDJ2012 年オペラ公演『愛の表と裏』

～制作現場からの報告～

今年も昨年、一昨年に引き続き、前半はアリアコンサート、後半はオペラ作品をコンパクトに縮小し、台詞と演技をつけて公演するという演奏形態をとることに決定し、後半の演目として、オッフェンバック作曲の喜歌劇『地獄のオルフェ』を選んだ。演目の決定は例年より少し早かったのだが、今回公演したフランス語版は、我が国では演奏歴が少なく、また会員で全曲版ボーカルスコアを所有する人も少なく、作品のイメージがなかなか掴めないこともあり、出演者の人選が大幅に遅れ、その結果台本の完成も遅れ、台本が出演者に行き渡り、最初の会合を持つことが出来たのは8月12日のことだった。

会合の席で、本番まであと40日という厳しい条件のもとで『地獄のオルフェ』を通常の舞台形式として仕上げるのは、あまりにも出演者の負担が大きすぎるので、楽譜や台詞を読めるように譜面台を配置し、ソロを歌う時には必要に応じて中央のパフォーマンス・エリアで演技も出来るようにするという、舞台形式と演奏会形式の折衷案が検討された。

私も譜面台を置くことには賛成したが、『地獄のオルフェ』は、演奏会形式で上演するには相応しくない作品という認識があるし、また中途半端な折衷方式でもこの作品の魅力を引き出すことが出来ないと考え、それなら、いっそのこと譜面台の設置も、演出のアイディアとして取り込んでしまい、楽譜を読む動作も、演技の一部として生かせないか、という構想が浮かんだ。

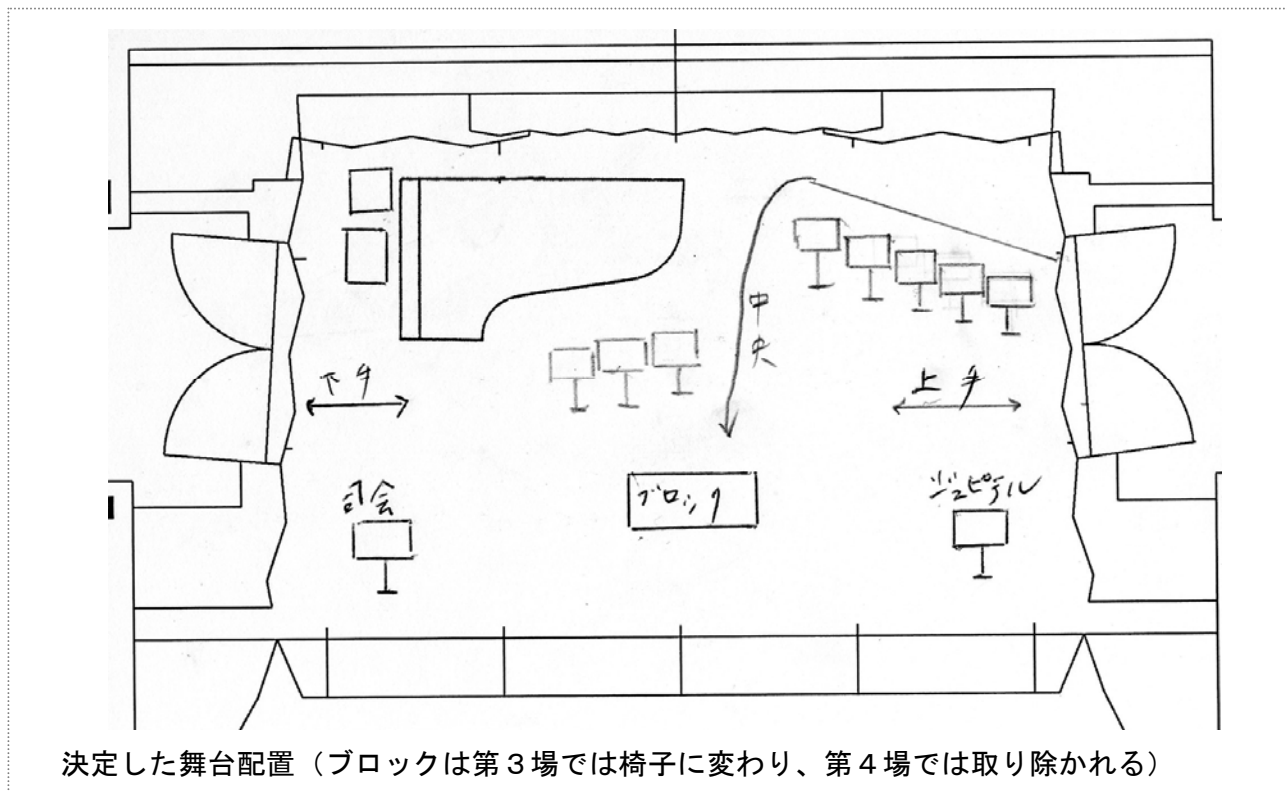
舞台配置について

譜面台と椅子を配置すると、演奏者がスムーズに移動出来なくなるので、合唱席については譜面台だけ使うという考えが頭に浮かんだ。しかし、ピアノの上手（右方向）に譜面台を8個並べると、譜面台が邪魔になりソロを歌ったり、演技をするとき、前方に移動出来なくなる。それで、譜面台ではなく椅子を8台並べる案を考え、9月4日のホール側との打ち合わせ時点では、この案を進めた。ところが6日の練習の際、練習マネジャーの秋山来実さんから、出演者たちみんなで考えた新しい舞台配置案が提出された。それは、譜面台をピアノの右に5台、ピアノの前に3台配置し、左右の譜面台の列に布を被せ、舞台上のオブジェとしても見せようという案である。この案については佐藤光政氏も絶賛していたが、私もこの案には感心した。これで、譜面台の後を廻り中央から前に入る動線が確保され、舞台への出入りも上手、下手の出入りと合わせて、舞台上の動きが多様になる。それと、第1、第2場については、正面にブロックを置く、私の案と合わせ、図のような舞台配置が確定した。

中央にブロックを置いた意図は、ソファなどと異なり室内家具に限定されたイメージを持たず、それを草原の石に見立て、ユリディスがそこに座って演技したり、「世論」その上に立ってオルフェを威嚇したり、オリンポス山の頂きという想定で女神達が地上を見渡す演技をするなど、色々な使い方が出来るからである。ただし、

第3、第4場は演技者の動きが大きく、ブロックは障碍になるので、第3場のプリュトンの私室ではブロックを椅子に置き換え、大人数で前後に左右に動く第4場では、ブロックも椅子も省くことにした。

この配置案が決まったことで、各役のそれぞれの場における基本的動きが、ほぼ決まった。



台本と音響について

台本と音響素材の作成は、このコンサートの企画が始まって以来、ずっと私の担当となっている。ただし、練習時に参加者の意見を聞き、手直しが行われる。今回は限られた練習時間という条件のもとで成果を上げるため、例年より台詞の削除変更などの手直しが多かった。

アイテムと衣裳について

乏しい予算の中で、相応しいアイテムと衣裳を如何に確保するかも、いつものことながら重要な課題の一つだが、今回は、各役の特徴的なアイテムとして、ユリディスには花輪を、世論にはこうもり傘を、そしてキュピドン（キューピト）には天使の羽、狩りの女神デュアヌ（ダイアナ）には矢筒を手に入れるよう指示した。若い世代の人たちは、インターネットなどの情報も上手に使いこなし、みんな頑張っで相応しいものを用意してくれた。またヴェニウス（ビーナス）役の岡田さんは、長い髪の方がよいのではと、自主的に仮装用の長い髪を用意してくれた。衣裳についても、みんなで工夫し、質素ながらもそれらしく見えるものを探したり、自前で作ったりした。佐藤光政氏が纏うプリュトンのマントについては、今井さんが地獄の王に相応しい衣裳を安価で手に入れてくれた。

練習について

総稽古に入る前の8月下旬～9月初頭にかけて、都内のスタジオなどで4回の公式練習を行った。練習会場の手配、関係者への連絡は、練習マネジャーの秋山来実さんを中心に出演者自身で行った。総稽古は9月9日、16日、17日の3回、我孫子市の北近隣センター並木会館多目的ホールで行った。練習会場の手配は、当日の2ヶ月前に我孫子市民でもある実行委員の浦富美さんをお願いした。この施設は昨年も総稽古時に使用しているが、選んだ理由は、スペース、音響設備とも十分で、しかも使用料金が安いからである。

ピアニストの亀井さんと私は毎回練習に参加したが、練習に入ったのが例年に比べ一月ほど遅れ、また出演者のそれぞれが仕事や他のコンサートを抱えているため、みんなが同時に集まるのはなかなか難しく、出演者全員が揃ったのは、9月17日の総稽古だけだった。練習に参加出来なかった役の歌のパートや台詞は、誰かが代わって歌ったり喋ったりして、練習を進めた。

それでも、毎回多くの出演者が練習に参加し、練習を重ねる度に、意気が高まって行った。9月9日の最初の通し稽古の後、『地獄のオルフェ』の演奏時間が予想したより少し長くかかることが判った。それで、無駄な部分を省くため、当日の参加者全員で話し合いを行った。熱っぽい議論が交わされ、気がついてみると、いつの間にか夜9時の退館時刻が迫っていた。昨年も参加したある出演者が「今回の方が自分たちでオペラを作っているという実感が強い」と呟いていたのを聞き、そこに出演者の主体的参加意欲を見出し、頼もしく思った。

そして17日の総稽古の日には、はじめて出演者全員が一堂に揃い、最後の通し練習を行ったが、歌唱、演技とも予想以上の出来映えで、本番に向けての手応えを感じた。

演出と演技、台詞について

昨年まで演出を担当していた島さんが参加しなかったのも、一応私が演出も兼ねることにした。舞台への出入り、ブロックの使い方など大まかな動きについては、9日の時点ではほぼ固まったが、練習期間が短く、細かい演技を指示するだけの時間がなかった。そこで、ポイントだけ説明し、それに従って各出演者に自分の演技を工夫してもらい、問題がある時だけ、意見を言うことにした。そういうやり方をした事で、若い出演者がかえって伸び伸びと演技し、それぞれの個性が引き出せた面もあったと思う。

会評で助川氏から指摘があった台詞についてだが、「台詞はゆっくり目に話すこと、重要な言葉についてはお客様の注意を引くように前後の間などに工夫すること」などを注意したが、演技者、場面によって、上手く行ったところと、そうでなかったところがあった。台詞については、佐藤光政氏のように経験豊富な人の芸を参考にしながら、より工夫して欲しいと思うが、台詞をともなった舞台の経験が浅い若い人たちにとっては、これからの課題であろう。

最後に！

周囲の方々には、「大丈夫」と強がってはいたが、練習開始が遅れ、練習期間が短かったこともあり、内心不安を拭えず、対外的な宣伝も控えめにした。

しかし、厳しい条件からすると、結果は予想以上の成功だったと言えよう。その最大の原動力は若い出演者たちの集中力と爆発力だったと思う。もちろん、忙しい中、欠かさず練習に参加して苦労を共にしてくれたピアニストの亀井奈緒美さん、公演全体を締め、そして若い人たちに良きアドバイスをしてくれた大ベテランの佐藤光政氏、総稽古の会場の手配、照明など裏方の仕事を完璧にこなしてくれた浦富美さんなど、ベテラン陣の存在も大きな支えにはなったが、今回は特に若さの力を実感し、頼もしく、そして羨ましく感じた。

心配した演出についても「気の利いた演出で十分楽しめた」というアンケートの回答もあり、それなりの出来だったと思う。観客数は220名で、満席の90%弱というところだが、事前の宣伝が控えめだったことを考えれば、上々だったと言えよう。

今回は第7回目の公演だったが、この企画は発展途上にあり、今後さらなる成果を上げて行く可能性がある企画と考えている。そして発展させて行くためには、意欲ある若い人達の積極的参加が不可欠である。終演後の打ち上げの席で、一部から裏方の役にも挑戦してみようという気運も芽生えて来ているのは喜ばしいことである。特にオペラのような総合芸術を作っていくためには、演技者と裏方の両方の力の重なり合いが必要である。この企画をさらに前進させて行くために、会員なら誰でも参加出来る話し合いの場をつくろうと考えている。

最後に、当日の演目を確認のため再掲載させていただく。

《当日のプログラム》

◆《前半》 魅惑のオペラアリア（アリアコンサート）

北風紘子 (Sop.) グノー 歌劇『ファウスト』より “宝石の歌”

岡田真実 (Sop.) マスネ 歌劇『エロディアド』より “美しく優しい君”

秋山来実 (Sop.) マスネ 歌劇『マノン』より “さあマノン空想はおしまい！”

高橋順子 (Sop.) ヴェルディ 歌劇『ファルスタッフ』より “秘密の抜け穴から”

同 歌劇『運命の力』より “神よ平和を与えたまえ”

鈴木望 (M-Sop.) J. シュトラウス 喜歌劇『こうもり』より “私はお客を呼ぶのが好き”

今井梨紗子 (Sop.) 上同 “侯爵さま、あなたのようなお方は”

高柳 圭 (Ten.) ドニゼッティ 歌劇『愛の妙薬』より “人知れぬ涙”

◆《後半》 オッフエンバック 『地獄のオルフェ（天国と地獄）』（ハイライト）

オルフェ：高柳圭 (Ten.) / ユリディス：大武彩子 (Sop.)

アリストテ&プリュトン：佐藤光政 (Bar.) / 世論：鈴木望 (M-sop).

ヴェニユス：岡田真実 (Sop.) / キュピドン：今井 梨紗子 (Sop.) / ディアヌ：北風紘子 (Sop.)

ジュノン&ジョン・スティクス：秋山来実 (Sop.) / ジュピテル：中山弘一 (Bar.)

ヴァイオリン：栗津惇 / 合唱：（出演者全員） / ピアノ：亀井奈緒美（全演目）

総合司会：佐藤光政 / 企画・構成・音響：中島洋一

（報告：実行委員長 中島洋一）

～愛の表と裏～

2005年に始まったこのシリーズの七回目の公演である。

例年通り、二部に分かれ、第一部は「オペラ・アリア」の演奏会型演奏、第二部は舞台つきのオペラ、今年はオフエンバックの「地獄のオルフェ」、通称「天国と地獄」が上演された。

第一部は若い歌手たちによるアリアの曲目。女声が六人で男声は一人であった。

曲目と演奏者個々の会評は長文になるので、一般論的な論評とする。

どの出演者も水準を超える修練の結果が現われ賞賛すべき出来栄であったが、総論として、いささかの重い問題点を指摘しておきたい。

演奏会用の曲も同じであるが、ことにオペラの場合は演技的表現の充足がもとめられる。

これから書く文にはイタリア語の用語を使う。日本語にすると意味が伝わらない。それに本誌を読む読者はこの程度の音楽用語は承知とこころえるからである。

それぞれの音の演技的表現、たとえば、staccato に対する tenuto, leggiero に対する pesante, sostenuto に対する marcato、その他その他。こうした対比の表情づけがないと音楽の演奏は平板になり本来の意図が伝わらない。これは、歌だけでなく日本では器楽演奏でもでも同様の現象が起こるのである。日本人の美観には対比の観念がない。古来からの生活様式からくるものであろう。しかし、たとえ西洋のものであろうが、民族性もすべて学習によって自分のものになるのだから、学びとり自分のものにすべきであろう。staccato と leggiero があり、次に tenuto が来るから表情が生きるのである。日本人の生活もいまは相当西洋式になったのだから、いずれ自分のものになるだろう。舞曲の場合これはことに目立つ要因になる。総論的に leggiero がほしい。全体が下に向かった pesante sostenuto になりがちなのである。七人の出演者のうち、ただ一人の男声高柳圭は曲目のせいもあり、一番、このましい出来であった。

第二部の「オペラ」は軽い仕草と装置、演技演出もまじえての上演であった。毎回の出演、佐藤光政の司会もかねたプリュトンの果たした役割が大きな貢献をはたした。ただ、いささか評をするならば、オペレッタではセリフの部分が多い。歌の

作曲 助川 敏弥

2007年に他界した作曲家、松村禎三の文をまとめた書である。編纂したのは、松村の門下生たちの会「アプサラス」。



松村禎三は私の生涯の畏友であり親友であった。年代もほぼ同じ、彼の方が一歳年長であるだけだった。私たちの出会いについては本書の中の章「忘れ得ぬひとびと」の中で詳しく書かれている。

松村禎三、私たちは「禎さん」の愛称で呼んでいた。この著書を読んでいると、「禎さん」がよみがえって会話をかわしているような思いがする。それだけ、彼は忘れがたく、そして不思議な魅力のある人であった。作曲家であるが、音楽だけでなく、世界について、また人間について、森羅万象について、あくなき関心と意識を持ち続け、禎さんとの話はいつも、ころよく、魅力あるものであった。禎さんは、頑固な思想を持ち続けていたが、他人の話をよく理解しようと誠心誠意耳を傾ける人であった。このことが私にとっては最もころよい思

い出をかたちづくっている。

七つの章からなり、自作についてから、人の出会いから、彼の秘芸であった俳句についての文までを収録している。これを見ると禎さんはまた、文章もたくみな人であったとあらためて感心した。彼は芸大の教官として短くない期間弟子を指導していた。若い人たちにとって、さぞかし魅力ある、また人気ある教育者であったろう。

あの年、2007年の八月、私自身が急病で入院し、かなり回復し、自分で病院内の売店まで行き新聞を買った。買った新聞を広げて死亡記事を知ったのである。病院内の公衆電話室で、当時まだ使われていたテレフォン・カードを散々使って、共通の友人たちと長い話をしたのであった。

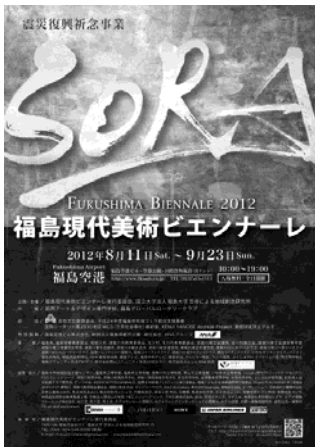
本題である作曲について、現代の作曲家について、禎さんの見解と思想はまことに感慨深い。いまの世代の人は、よく読んでほしい。作曲にしたがう人はなおのことである。

福島日記 (13)

作曲 小西 徹郎



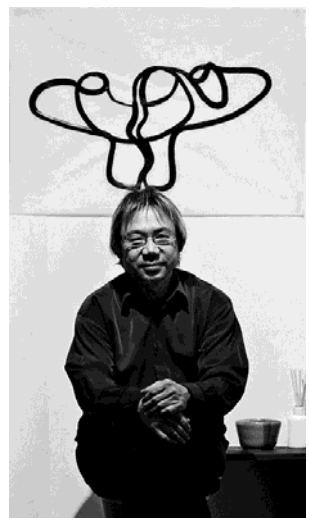
「アートが空に届く」そんな思いがこの8月にはあった。2012年8月11日(土)から福島空港で始まった福島現代美術ビエンナーレ2012“SORA”にアーティストとして参加した。主な出品アーティストは、オノ・ヨーコ氏、大友良英氏、大野慶人氏、など素晴らしき芸術家が多く出品されている。主催は福島現代美術ビエンナーレ実行委員会、そして国立大学法人 福島大学 芸術による地域創造研究所。共催は国際アート&デザイン専門学校、福島グローバルロータリークラブ。実行委員長は国立大学法人 福島大学 芸術による地域創造研究所の渡邊晃一氏。国際アート&デザイン専門学校の柳沼信之校長の推薦を受けこのたび参加することになった。



そのパフォーマンスは8月19日に福島空港の国際線貨物施設青テント、国際線チケットカウンター前で行われた。今回私がどうしても披露したかった「BCD」とのコラボレーション、それが日本初の披露目がこの福島現代美術ビエンナーレであったことは誠にうれしく思うと共にその機会に深く感謝している。

このBCDとはBimanual Combo Drawingの略で「二筆描き」のことをいう。利き手に頼らず両手を平等な動きで同時にアンシンメトリックに描くことで視覚的にも非常に面白さのある描画プログラムである。このBCDプログラムを開発されたのはメルボルン大学 芸術哲学フェローの登崎榮一氏。以前から私はこのBCDプログラムを作曲に活かさないだろうかと思考を深め「BCD音楽様式」として研究をし、エッセイまで書いていた。(登崎氏のBCD公式サイトに掲載)このたびそのコラボレーションが実現した。和の「テイスト」がほしかったため、登崎氏にはBCDを筆で描いていただいた。これらを映像化して私のトランペット(ライブエレクトロニクス)と地唄舞の花崎さみ八氏、そして映像とのパフォーマンスとなった。

映像制作には日本でも有数のゲームプログラマー(スーパーマリオブラザーズの産みの親)で、ドイツでの映像制作活動でも知られる信藤 薫氏。そして映像に参加されてらっしゃるのは草間彌生氏を発掘したことで有名である現代美術コレクターで舞踏家の小山朱鷺子氏である。とても素晴らしくとても恵まれたメンバーでのメルボルンと日本との海を越えたパフォーマンス作品を発表できたことはこのうえない大きな喜びである。



登崎榮一氏

本番前日から福島に入り様々な準備をマネジメントを依頼した教え子の佐藤美風（Wasabi Music Entertainment）と共に行い機材の積み込みから当日は会場設営から記録映像、司会までしてもらった。事前準備から記録映像の編集までこのパフォーマンスの裏方、舵取りを任せた。当日はWasabiの小島先生や国際アート&デザイン専門学校の学生たちも駆けつけてくれた。2回あった本番ともに福島大学の学生、そして実行委員長の渡邊晃一先生も見届けてくださりとてもうれしく思った。



信藤 薫氏

今回のビエンナーレは空港を使用しているためとても条件が厳しい中、渡邊晃一先生をはじめ福島大学の学生たちは一生懸命会場の管理をしていた。

渡邊晃一先生はほぼ休日もなく毎日のように会場にはりつめていらした。1回目のパフォーマンスの後、渡邊先生が空港にかけあってくくださり、よりよい環境を整備してくださった。ギリギリまでの粘り強い交渉にただひたすら感謝の気持ちでいっぱいである。また、終演後、渡邊先生は展示作品の解説を丁寧にしてくださりその作品に込められた想いをたくさん感じることができた。



福島現代美術ビエンナーレ2012“SORA”が何故福島空港で行われたのか？夕暮れの空港をみて私は感じた。窓に描かれた絵を通して見た福島の空はとても美しかった。東日本大震災そして原発事故、福島の地は厳しい環境にさらされている。芸術を通して想いを“SORA”に届けたかった、その強い願いがこの夕暮れから感じることができた。だからこの、そしてこの機会、このビエンナーレは空港でなくてはならなかったのだ。その想いの強さを願いを感じたとき私も願った、福島発のアートが空を越え海を越えて世界中に届くことを！そして一日でも早く復興することを！

（こにし・てつろう 作曲会員）

写真提供：国立大学法人 福島大学 芸術による地域創造研究所・
Wasabi Music Entertainment



花崎さみ八氏（右）と

様々な音の風景 IX

日本音楽舞踊会議創立50周年記念

《ご挨拶》

本日はお忙しい中のご来場、心より御礼申し上げます。

この演奏会は本会の主要な催しの一つとして、2004年より毎年、内外の20世紀以降の音楽作品の紹介を主として、会員演奏家、同じく作曲家の参加、共同を中心に回を重ねて参りました。ところで、今回は日本音楽舞踊会議創立50周年記念となります。邦人作品を含む20世紀後半の作品と現在進行中の会員作曲家の作品が若手からヴェテラン迄を含む優れた演奏家によって演奏されます。

この公演で一人でも多くの方々が現代の音楽に触れ、共感を持って最後迄お楽しみ頂ければと切望して止みません。

企画制作 北條直彦（公演局長）



【プログラム】

1. 林 光：ピアノソナタ第1番 栗栖麻衣子（Pf.）
2. エルヴィン・シュルホフ：ヴァイオリンとチェロのためのデュオ
栗津 惇（Vn.）奥村 景（Vc.）
3. 北條直彦：「響相」記憶の風景より～ピアノ独奏のための～ 古川五巳（Pf.）
4. 鈴木 登：「被爆地蔵によせて」～弦楽四重奏のためのレクイエム～
恵藤久美子（Vn.）繁樹百合子（Vn.）齊藤 和久（Vla.）安田謙一郎（Vla.）
-----（休憩）-----
5. 武満 徹：「揺れる鏡の夜明け」～ヴァイオリンデュオのための
恵藤久美子（Vn.）田口美里（Vn.）
6. 中嶋恒雄：万葉による挽歌
中嶋啓子（Sop.）千葉純子（Vn.）安田謙一郎（Vc.）
7. バルトーク：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第一番
北川靖子（Vn.）北川暁子（Pf.）

2012年10月15日（月） すみだトリフォニーホール 18:30 開演

《曲目解説・出品者／演奏者プロフィール》

① 林 光 ピアノソナタ第1番

林光のピアノソナタは全3曲。最初のソナタはNHKの委嘱により1965年に完成、1967年作曲者のピアノによって放送初演された。この作品において林は「指のすべりがいつの間にか曲のかたちをとってしまうことを、おさえながら書いた」、「各楽章は、ひとつのモチーフでゆるく結びつけられている」と述べている。モチーフとは第1楽章開始直後に現れるミ、ファ、ラ♭の音型である。モチーフ音型から生まれたペントニックモードは時にずらされ重ねられ、日本の5音音階の様な独特の響きも聞こえてくる。1955年の「オーケストラのための変奏曲」がバルトークの影響のもと作曲されたように、この第1ソナタも意識的にバルトーク風の流儀で書かれたという。

「子供のときから親しんできた西洋近代音楽へのかなり素朴な信頼が多かれ少なかれ脈打っている、そしてそのせいだろうか、借り着にしてはわりあいと本音が歌えているように思える『交響曲ト調』（1953年）を書いたときとちがって、私は迷いはじめていた。いままでのところにはいられない。だが、それならばどこへ行こう。」（林光著「私の戦後音楽史」）「作品間の不統一が問題となり、解決までに20年近い歳月を費やすことになった」（「林光の音楽」小学館）…多様性を包括、精錬させ、次第に独自の書法へ向かっていった道程を想像する。2012年1月5日、享年80歳で他界された。ご冥福をお祈りしている。第1楽章：Andante、第2楽章：Allegro、第3楽章：Sostenuto pesante

（文：栗栖 麻衣子）



【栗栖 麻衣子（くりす まいこ）：ピアノ】

日本大学芸術学部音楽学科ピアノコース卒業後ウィーンにてヴィクトル・トイフルマイヤー、許裕安のもとピアノ演奏及び教育法について研鑽を積む。国内外において数々のマスタークラスを受講。第32回家永ピアノオーディション合格。第12回JILA音楽コンクールピアノ部門第1位。現在各地でソリスト、アンサンブルピアニストとして演奏活動を行う傍らコンサートプロデュースや後進の指導に携わっている。これまで上田純子、黒川浩、大原裕子、パウル・バドゥラ＝スコダ、ウラジミール・トロップ、深沢亮子他各氏に師事。国際芸術連盟専門家会員、日本音楽舞踊会議会員および理事。

②エルヴィン・シュルホフ：ヴァイオリンとチェロのためのデュオ

エルヴィン・シュルホフは1894年チェコに生まれた作曲家、ピアニスト、指揮者。ドイツで学び、演奏・作曲の両面で活躍。ドビュッシーにも師事している。ジャズなどあらゆるジャンルの影響を受けた多彩な作品を他に先駆けて数多く残したが、ユダヤ人であったため、ナチスドイツにより退廃音楽の烙印を押され、自身も強制収容所に収監。そのまま1942年に結核でこの世を去った。近年徐々にその作品が再認識されてきている。

バイオリンとチェロの為の二重奏曲は1925年に作曲、ヤナーチェクに捧げられた。全四楽章で構成され、一楽章 moderato、二楽章 zingaresca : allegro giocoso、三楽章 andantino、四楽章 moderato から成る。

民族音楽の色濃いリズム、懐古的な旋律などがみられるだけでなく、重音ピチカートやフラジオレット、コルレーニョなど弦楽器独特の奏法を幅広く駆使しており、音色、色彩豊かな作品。(文 栗津 惇)



【栗津 惇(あわづ まこと) : ヴァイオリン】

東京都出身。桐朋学園大学卒業、同研究科修了。ヴァイオリンを小森谷巧、篠崎功子、室内楽を藤井一興、豊田弓乃、藤原浜雄、東京クアルテットの各氏に師事。在学中は桐朋学園室内楽演奏会、桐朋アカデミーオーケストラ演奏会などに出演、コンサートマスターもつとめる。全日本学生音楽コンクール、日本クラシック音楽コンクール全国大会などに入賞。奨学金を得てウィーン国立音楽大学マスターコースに参加、エドワード・チェンコフスキー氏に学ぶ。特別賞受賞。イタリア文化会館「日本におけるイタリア2009・秋」にてビバルディのドッペルコンチェルトを演奏、評価を受ける。本年4月 日本音楽舞踊会議主催 フレッシュコンサートに出演。



【奥村 景(おくむら けい) : チェロ】

9歳よりチェロを始める。桐朋女子高等学校(共学)を経て、桐朋学園大学卒業。05年新潟室内合奏団とハイドンの協奏曲を共演。石川ミュージックアカデミーにてジャン・ワン、ルドヴィート・カンタ、草津音楽祭にてタマーシュ・ヴァルガのレッスンを受講。今までにチェロを渋谷陽子、毛利伯郎の各氏に、室内楽を東京クアルテット、山口裕之、藤井一興、苅田雅治の各氏に師事。これまでに、サントリーレインボウ21デビューコンサート、ラフォルジュルネオジャパン、桐朋学園室内楽演奏会、他、多くのコンサートに出演。また現代曲にも意欲的に取り組んでいる。

.....
③北條 直彦 : [響相] 記憶の風景より～ピアノ独奏のための～

“Kyousou” from Landscape in Remembrance for Piano solo

この曲は、自己の様々な心象風景を音の持続上に定着させようと試みて来た『響相』シリーズの中の一つ。初演は2008年10月、澤田勝行氏によって。今回は古川五巳氏による再演となる。初演時のプログラムノートによると、前に書いた曲では実現しなかった、体感するリズムや躍動感のアモルフな表現の作品への定着への欲求がこの曲の出発点、とある。また、記憶について述べると、それはノスタルジーと云う顔を持っており、遙か昔、野原を駆け巡った少年の日であったり青春の日のほろ苦い思い出や、思い出したくもない

忌まわしいものであったりもする。だが、それらは、曖昧模糊としており、まるで霧の中を歩くようだ。これは、この曲のアモルフな音の流れと結びつく。幾つかのモチーフの断片は記憶を呼び起こす鍵となっており、ある記憶の情景から、それへの執着や郷愁、強迫観念、固定観念などが不連続的な響きの連鎖の中で呼び覚まされる。尚、『響相』は作曲者の造語で“響きの様々な顔を意味しており、それは「記憶」の様々な風景と相関する。

(文：北條直彦 0' 12 9/4)



【北條 直彦 (ほうじょう なおひこ) : 作曲】

東京芸術大学作曲科卒業。池内友次郎、矢代秋雄、三善晃の各氏に師事。作品「デリバランス」、「響相」～記憶の風景より～室内オーケストラのための、「インタープレイ」～三人の奏者のための、「インタープレイ2」、「メタモルフォーゼ」～ヴァイオリン独奏のための、「パースペクティブ」ピアノの為の、他多数。現在、日本音楽舞踊会議理事、同公演局長。日本現代音楽協会会員、厚生館福祉会評議員、ジャズ様式の研究者、即興演奏家 (pf) でもあり「アストル・ピアソラタンゴ名曲選」「新主流派以降の現代ジャズ技法」第1巻、第2巻、第3巻等の出版、「国際音楽の日フェスタ」「NHK FM」出演等がある。



【古川 五巳 (ふるかわ いずみ) : ピアノ】

東京芸大付属高校から東京芸大ピアノ科進学、卒業後、ピアニスト園田高弘氏の指導を受け、1973年同氏のすすめで西ドイツ (当時) ミュンヘン音大に留学、M.L. ヒンデミット女史、F. ミクサ氏、E. ウェルバ氏、H. テッパー女史等に師事、1977年同大マイスター・クラスを修了した。

ピアノ・ソロ、歌曲伴奏、チェンバロ等幅広い分野で演奏活動を続け、指導者として昭和音楽大学教授を務めている。

1994年から、ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全32曲の作品番号順による演奏会を松山と東京で開催、1999年に弾き終えた。 日本音楽舞踊会議 会員

.....

④鈴木 登 : 「被爆地蔵によせて」 ～弦楽四重奏のためのレクイエム～

東京・目黒区八雲の常円寺に、広島原爆ドーム (当時は広島県産業奨励館) に隣接していた西蓮寺というお寺で被爆し、胴体はバラバラに吹き飛ばされたものの、瓦礫の中から奇跡的に発見された「子育て地蔵尊」のまことに穏やかな美しいお顔が祀られています。このお地蔵さまは様々な経緯をたどり、昭和二十年の後半から現在地に祀られています。以来ずっと目黒区在住の被爆者の方たちの心のよりどころとなってきました。そして毎年八月六日の原爆投下記念日には同寺で「子育て地蔵尊」のご供養と広島・長崎被爆者故者の追善法要が営まれてきました。

1994年八月六日は丁度五十回忌に当たり特別に音楽法要という形でとり行われましたが、この曲はその法要の読経の中に組み入れられて演奏される鎮魂曲=レクイエム=として目黒区の被爆者の会 (朋友会) からの委嘱により作曲され同寺の本堂で初演されたものです。

独奏チェロによる「序」に始まり「祈り」・「怒り」・「浄歌」・「結」の5部構成になっていますが、全曲続けて演奏されます。全体の響きは、聴き手に不快感のみ与えるようないわゆる現代音楽にだけはして欲しくないという、当時の朋友会会長さんからのたっのご希望を踏まえて、私なりにコンセプトしましたが、果たして旨くいっていますかどうか。

この曲は初演から18年目を迎え今回が4度目の再演となりますが、そのきっかけとなったのは今年の福島原発事故でした。あの事故は私たちに、年々風化しつつあった放射能の恐怖を再び現実の下に引き戻し改めて67年前の広島・長崎を思い起こさせることとなりましたが、更に私にとっては凶らずも同郷の身として、誰よりも痛切な思いに駆られる日々を過ごしてきた現実があります。本日この曲を聴いて頂けることは、私にとって積年の反核への思いを訴える場として、千載一遇のチャンスと思っています。（文：鈴木 登）



【鈴木 登（すずき のぼる）：作曲】

東京芸術大学作曲科卒。池内友次郎、島岡 譲、矢代秋雄、遠山つや、諸氏に師事。

＜作品＞ ヴァイオリンのための「初うい章」、ピアノのための「ソナチネ」、無伴奏フリュートのための「風景三幅」、弦楽四重奏のための「レクイエム」、バレエ曲「白鳥の歌が聞こえる」、「一輪のバラは嫺たおやかに呼吸する」、他。

楽譜出版「バレエレッスンピアノ曲集」I、II。他に歌曲、童謡、シャンソン、タンゴ、など多数。 日本音楽舞踊会議会員。



【恵藤 久美子（えとう くみこ）：ヴァイオリン】

3歳より母にピアノを、5歳より父にヴァイオリンの手ほどきを受ける。7歳の時、斎藤秀雄氏の薦めにより、ヴァイオリンの道を歩み始める。同時に桐朋学園「子供のための音楽教室」鎌倉分室へ入室する。ヴァイオリンを鷺見三郎、鷺見健彰、海野義雄の各氏に師事。室内楽を黒沼俊夫、斎藤秀雄両氏に師事。第41回日本音楽コンクール第2位入賞。

1972年、兄、堤剛と「二重奏の夕べ」を、東京とカナダのオンタリオにて開催。1979年、リサイタルで弘中孝氏と共演。2003年、2004年、2005年、2月深澤亮子氏、安田謙一郎氏とピアノ、ヴァイオリン、チェロの夕べを開催。

2002年7月には、深澤亮子氏とヴァイオリンとピアノの夕べを開催。2004年6月中野洋子氏とデュオコンサートを開催。東京フィル、新日本フィルとメンデルスゾーンの協奏曲、札幌響とシベリウスの協奏曲、山形響とモーツァルトの協奏曲、桐朋学園オーケストラとブルッフの協奏曲を共演。その他アマチュアオーケストラとの共演も数多い。

1975年より約10年間、桐五重奏団のセカンドヴァイオリンとして活躍する。また、1980年より2年間山形交響楽団の客演コンサートマスターとして在籍する。現在、アンサンブル・アルス・ノバコンサートマスター。桐朋学園大学特任教授。日本音楽舞踊会議会員。



【繁樹 百合子（しげます ゆりこ）：ヴァイオリン】

4歳よりヴァイオリンを始め、堤清、宗倫安、鷺見三郎の各氏に師事、桐朋学園「子供のための音楽教室」を経て同高校音楽科を卒業後ウィーンに留学、コンセルヴァトリウムにてワルター・シュナイダーハン教授に師事。ムジークフェラインにてデビューリサイタルを開く。帰国後、日本でのデビューリサイタルを開催、日本室内合奏団のコンサートマスターとして活躍、NHK-FM に出演、アメリカにおけるリサイタルなどの活躍後、東京ゾリスメンバーを経て、現在ソロ、室内楽で活動をしている。86年より隔年で、堀了介、滑川幸子とトリオの夕べを開催、99年より隔年で滑川幸子とデュオの夕べを開催。



【斉藤 和久（さいとう かずひさ）：ヴィオラ】

父の手ほどきで5歳よりヴァイオリンを始める。室内楽を安田謙一郎氏に師事。ロバの音楽座のゲストプレーヤーを務め、楽しく心暖まる音楽を学ぶ。桐朋学園大学卒業後、新日本フィルに5年間在籍。英国ロイヤルアカデミーサマーコースを受講し、アマデウスカルテット、ノーバート・ブレイニン氏の演奏及び指導に求めている感性が共鳴し自身の演奏法を決定づける。松尾学術振興財団最優秀賞を二年連続受賞。大阪国際室内楽コンクール入選。サイトウキネンふれあいコンサートにヴァイオリンとヴィオラダガンバで出演、大阪フィルゲストヴィオラ首席、東京シティフィルゲストコンサートマスターなどで出演。現在スタジオミュージシャンとして小池弘之氏のアシスタントを務め、ドラマ、CM、映画、CDなどのレコーディングに携わる。他に、バッハ協会管弦楽団コンサートマスター。きさカルテット第一ヴァイオリン奏者。安田弦楽四重奏団ヴィオラ奏者。ジャズヴァイオリニスト。



【安田 謙一郎（やすだ けんいちろう）：チェロ】

1955年斎藤秀雄に師事。1966年第3回チャイコフスキー国際コンクール第3位入賞。ガスパール・カサドに師事。1968年よりピエール・フルニエに師事。1973年以降、ヨーロッパ各地で、リサイタル、コンチェルト、レコーディングなど多方面で活躍、74年小澤征爾指揮サンフランシスコ響と共演。プラード・カザルス、サン・モリッツ、モンルー、グスタード・メニューインなどのフェスティバルに参加。1986年には安田弦楽四重奏団を結成、クワルテットの活動にも多くの力を注ぎ、80曲におよぶハイドンの弦楽四重奏曲全曲演奏、ベートーヴェン年代順室内楽の演奏会等、意欲的なコンサート活動をしている。日本音楽舞踊会議会員。

⑤武満 徹：「揺れる鏡の夜明け」～ヴァイオリンデュオのための

アニとアイダ・カヴァフィアン姉妹の依頼により書かれた作品。二人によって1983年11月、カーネギー・ホールで初演された。作曲者の楽譜ノートによると、この作品は大岡信とトマス・フィッシモンズによる同名の連詩に基づいて作曲されたとある。

曲は次に示した四つの部分からなる。

- I 秋 Autumn (フィッシモンズ)
- II 過ぎて行く鳥 Passing Bird (大岡信)
- III 影の中で In the Shadow (大岡信)
- IV 揺れる鏡 Rocking Mirror (フィッシモンズ)

(文：北條 直彦)

【恵藤 久美子 (えとう くみこ)：ヴァイオリン】 (前ページ参照)



【田口 美里 (たぐち みさと)：ヴァイオリン】

日本クラシック音楽コンクール全国大会第一位。「コンセールマロニエ 21」弦楽器部門第一位、他多数のコンクールで優勝、入賞。読売新人演奏会、サイトウキネンフェスティバル、アフィニス夏の音楽祭等に出演。

桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学、同研究科卒業。これまで、恵藤久美子、原田幸一郎、堀正文各氏に師事。ソリストとしてや、室内楽での活動も幅広く行っている他、桐朋学園子供のための音楽教室講師として後進の指導にも力を注いでいる。

現在、東京都交響楽団ヴァイオリン奏者。

.....

⑥中嶋 恒雄：万葉による挽歌 (Elegy from Manyo)

この曲は、当初ソプラノ、ヴィオラ、箏のために作曲され、1986年に私的な会第3回アルブレオ音楽展で初演された。その後、改訂を重ね本会の安田謙一郎氏の協力を得て、上のような編成で再演をする事になった。曲は2つの部分からなり、前半は器楽のみで、後半はソプラノが加わって演奏される。

歌詩は、柿本朝臣人麿が妻の死んだ後、泣き悲しんで作った長歌にもとづいている。

(文：中嶋恒雄)



【中嶋 恒雄（なかじま つねお）：（作曲）】

東京芸術大学音楽学部作曲科、指揮科卒業。1984年カリフォルニア大学サンディエゴ校に研究員として在籍する。上野学園大学、東京学芸大学など多くの大学で講師を勤めるとともに、文部省大学設置審議会委員長など、日本の音楽大学行政に関わる多くの仕事をした。1990年第1回山梨県文化奨励賞受賞。現在山梨大学名誉教授。財団法人音楽文化創造参与。日本音楽舞踊会議 会員。



【中嶋 啓子（なかじま けいこ）：ソプラノ】

山梨大学教育学部音楽科卒業、片野坂栄子氏に師事。平成11年ミラノ音楽院に留学し、カルラ・ヴァンニーニ、マルガレータ・グリエルミ女史のもとで研鑽を重ねる。2004年にチェコ・プラハスメタナ博物館ホールにてグロスネロヴァー・ユリア大唄とジョイントリサイタルを開催した。本年6月には再びチェコに渡り、各地を演奏旅行した。特にクロムニエジーシュの現代音楽祭に日本代表として招かれ、好評を博した。

2011年より YOUTUBE 上に演奏を発表している。



【千葉 純子（ちば じゅんこ）：ヴァイオリン】

桐朋学園高校、大学を経てジュリアード音楽院に奨学生として留学。在学中にNYアーティストインターナショナルコンクールで優勝、カーネギーリサイタルホールでNYデビュー。これまでに、プラハ放送交響楽団、プラハ室内管弦楽団、ドイツ・バウハウス・リステン、ウィーン・ヴィルトゥオーゾ、タイペイ交響楽団などと共演。CDは、「レスピーギ：ヴァイオリン・ソナタ」「モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲全集 I」「ヴァイオリン名曲の花束」など6枚をリリース。ソロの他、紀尾井シンフォニエッタ東京、チェンバーソロイスト KANAGAWA のメンバーとしても活躍。

フェリス女学院大学音楽学部講師、洗足学園音楽大学講師、山梨学院大学附属小学校特別講師。

【安田 謙一郎（やすだ けんいちろう）：チェロ】（前々ページ参照）

⑦バルトーク ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第一番

この曲は1921年バルトーク40歳の時にヴァイオリニストのイエル・ダラーニのために書かれ作曲者自身のピアノで初演されている。この時期は彼がハンガリーの民族音楽に没頭し、一方ではドビュッシーの印象主義やシェーンベルクの新音楽と云った当時の前

衛の影響も合わせて受けつつ自己のスタイルを確立しつつあった時期である。従って演奏時間、30分を超えるこの大曲にはバルトーク音楽の多様な可能性が曲中の至る所に見られる。その後、彼は第三弦楽四重奏曲、第四弦楽四重奏曲を27年、28年に完成、無調的要素と多調的要素、多旋法的要素と民族性の融合による独自のスタイルを確立した。曲は三つの楽章からなり第一楽章（Allegro）、は自由でラプソディックなソナタ形式。第二楽章（Adagio）は感傷性と力感を併せ持つ曲。第三楽章（終曲）はバルトーク特有の民族性が、激しく荒々しい舞踏的なリズムによって、またピアノのパートの打楽器的な不協和な鋭い響きによって本領を発揮する。曲の途中では第一楽章に出たテーマの1部が変化して呼び覚まされていてソナタとしての緩い関連を保っている。それともう一つのこの曲の注目点はピアノとヴァイオリンのパートがそれぞれ独立した主張を戦わせる事でデュオとしての意味性を持ち音楽として融合している事である。ところで、話が跳躍するが、異論はあろうとは思いますが、筆者の私見を述べると、例えばリストのハンガリー狂詩曲第二番（前奏のLassan, 主部のFriska）を現代の音に置き換えるとこの曲の第二楽章、第三楽章と何か似かよったものにならないだろうか？と云う事は彼はリストの影響を相当強く受けている作曲家なのかも知れない。

（文：北條 直彦）



【北川 靖子（きたがわ きよこ）：ヴァイオリン】

W. シュタフォンハーゲン教授に師事。東京藝術大学卒業。71年オーストリア国立ウィーン音楽大学入学、ヴァイオリンをF. サモヒール教授に、室内楽をF. ホレチェック教授に師事。75年ウィーン音楽大学を全教授一致の最優秀で卒業。ザルツブルク・ミラベル宮殿、東京でリサイタル。

76年ハンブルク交響楽団に入団。コンサートミストレスに就任し81年にハンブルク市文化局主催コンサートでリサイタル。87年東京にて

リサイタル。

89年北川暁子、千本博愛と「セルヴェ・トリオ」を結成し以後毎年演奏会を開催。北川暁子とは85年12月から91年12月にかけて25回の「デュオの夕べ」を開催、92年以降は「ソナタの夕べ」を毎年開催している。

現在、瀬戸フィルハーモニー交響楽団（高松）コンサートミストレス。日本音楽舞踊会議理事



【北川 暁子（きたがわ あきこ）：ピアノ】

1969年ブゾーニ国際コンクール第3位。ベーゼンドルファーコンクール優勝。1970年ミュンヘン国際コンクール第2位（1位なし）。1984年デビュー20周年にベートーヴェンピアノソナタ全32曲を7夜連続演奏。デビュー以来、世界各地で演奏。

昨年から本年にかけて、3度目のベートーヴェンピアノソナタ全曲演奏会を開催。

武蔵野音大・ウィーン国立アカデミー卒。

本年3月、東京芸術大学教授職を定年退官。日本音楽舞踊会議 副理事長。

コンサート・レポート

『オーケストラ・トリプティーク 弦楽による奏楽堂の響き』

作曲 橋川 琢

1890年（明治23年）に創建された奏楽堂は、日本最古の木造洋式音楽ホールで、東京音楽学校（現：東京藝術大学）の施設。その後、愛知県の明治村へ移転計画が持ち上がったが、1987年（昭和62年）に現在の場所へ移された。そしてこの度、老朽度・耐震強度等の調査のため、一時休館となる。

本年は山田耕筰が日本人初の管弦楽曲（「序曲二長調」1912年）を書いてから100年。2012年9月16日のこの演奏会は「朝の歌」で始まり「夜の歌」で締められた一曲の委嘱初演を含む7人の作曲家によるプログラム。西田幸士郎の情熱的な指揮によってまとめられた弦楽合奏曲作品が中心となり構成され、そこにピアノソロの加畑嶺、ヴァイオリンソロの小泉悠と小形真奈美、箏の藤川いずみが活躍する協奏曲的作品が入っており、弦楽合奏のプログラム中に、個性溢れる色鮮やかな音の花を開かせる。



今回取り上げられた作曲家は、全員この舞台上で演奏をされたという共通点がある。当日インタビューでは水野修孝、そして小田原から駆けつけた眞鍋理一郎と司会との長い親交から来る親しみのあるやり取りも、聴衆の笑顔と大きな拍手を呼んだ。

この100年で初演された3,000を超えるという日本人の管弦楽曲。初演されたきりで再演の機会もなく眠ったままのそれらの曲に対し、『なかなか聴く機会のない知られざる作品を掘り起こし、それら名曲に今一度接する楽しみを広く提供したい!』という心意気溢れる、音楽評論の西耕一氏の好企画。当日は全座席の8割を埋める熱心な客が訪れ、指揮者、演奏家、作曲家、音楽評論、ジャーナリスト、そして多くの音楽愛好家はその船出を祝福した。

オーケストラ・トリプティークの今後に期待したい。

[演奏曲目]

- 松村禎三 (1929-2007) ピアノと弦楽オーケストラのための朝の歌 (2001)
- 眞鍋理一郎 (1924-) 追憶 (2012/委嘱初演)
- 團伊玖磨 (1924-2001) ソロヴァイオリンと弦楽のための黒と黄 (2001/遺作)
- 別宮貞雄 (1922-2012) 弦楽オーケストラのための小交響曲 (1959)
- 三木稔 (1930-2011) 箏譚詩集第二集《春》(1976)より〈芽生え〉新箏と弦楽による
箏譚詩集第二集《夏》(1983)より〈芽生え〉新箏と弦楽による
- 黛敏郎 (1929-1997) ヴァイオリンと弦楽オーケストラのためのカプリチオ (1988)
- 伊福部昭 (1914-2006) 弦楽オーケストラのための日本組曲 (1998)
- 水野修孝 (1934-) 弦楽合奏のための夜の歌 (1997/2011)

主催：JCA 後援：スリーシェルズ

2012年9月16日（日）旧東京音楽学校奏楽堂

（きつかわ・みがく 本誌副編集長）

※連載「明日の歌を」は、今月号紙幅の都合でお休みといたします。

《会員の活動紹介》

★松下佳代子さん奇跡の復活★

長い間病気静養され、演奏活動から遠ざかっていた松下佳代子さん（ピアニスト・賛助会員）が奇跡の復活を遂げられ、ローマ法王の前で御前演奏するほどに回復されました。ご本人も眠り姫が目覚めたような、あるいは浦島太郎のような気分だと語っておりました。以下のHP URL よりローマ法王の御前で、ご主人のチェリスト、トーマス・ベックマン氏と演奏する動画を観ることが出来ます。

<http://it.gloria.tv/?media=321087&connection=cabledsl>

ローマ法王には、福島をはじめ被災地が復興のため世界の助けを必要としていること、脱原発の市民運動が起きていることなどを伝える大役を務められた、ということです。復活を記念して、以下のコンサートを開催いたします。

◆ヨーロッパで活躍する希代のピアニストが、難病脳脊髄液減少症克服して復帰！

松下ベックマン佳代子

ローマ法王御前演奏記念 報告会&コンサート

2012年10月21日(日) 新宿文化センター小ホール 18:45 開演

(プログラム)

御前演奏に至った経緯と演奏報告／証言：絶望からの復帰

(当日の演奏曲)

ロベルト・シューマン作曲「子供の情景」

フレデリック・ショパン作曲「バラード第1番」

助川敏弥作曲「山水図」／高田三郎作曲「子守歌」

◆アンコールコンサートのお知らせ

『アンコールコンサート』を11月11日(日)19時開演、四谷区民ホールで行います！おかげさまで、10月21日(日)の新宿文化センター(小)でのコンサートは、ほぼ完売いたしました。当日券は10枚だけです。みなさま、応援ほんとうにありがとうございます。申し込み受け付けは、引き続き、変わりなく行っていますので、どんどんお申込みください。よろしくおねがいたします。

ちょうどトーマス・ベックマンが5日間ほど来日するので、チェロを持って来られれば、賛助出演してもらい、皆さまに、御前演奏で演奏した曲を生でお楽しみいただきます。御前演奏のビデオも少し、ご覧に入れます。おとぎの国のようなようすをお楽しみください。私の9年ぶりの復帰の舞台です。

ベートーベンのピアノとチェロのためのソナタ3番、フォーレのエレジー、イタリア民謡ニーナ(ピアノ譜は御前演奏のために私がアレンジしました)

ラヴェルのハバネラなど。

また、私の復帰に多大な尽力と進んだ研究と目をもって治療してくださった高木先生のお話しも伺います。

会と会員の情報

CMDJ 会と会員のスケジュール

10 月

- 7日(日) 広瀬美紀子ピアノリサイタル
ベートーヴェン：ピアノソナタ第17番「テンペスト」・ピアソラ：
(北條直彦編曲)「孤独」助川敏弥：夏のうた(委嘱初演)他
【王子ホール(銀座) 14:00開演 3,500円】
- 8日(月祝) 大矢絢子 Kammermusik-Konzert～ウィーン・ミュンヘンの巨匠たちとともに
に～共演：エルネ＝セバスチャン(ヴァイオリン)他
シューマン：ピアノ四重奏曲Op.47他【salon TESSERA 14:30開演
全自由席 3,500円】
- 9日(火) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】
- 14日(日) ピアノ部会試演会【10:00～13:00 戸引会員宅】
- 15日(月) 「様々な音の風景」～20世紀以降の音楽とその潮流～
【すみだトリフォニー小ホール 18:30開演 全自由席 前売券3,000円/当日3,500
円(会員無料)】(詳細裏頁掲載：チラシ参照)
- 20日(土) 原口摩純 四国・徳島にて2回コンサート(鳴門市ドイツ館 他)
- 20日(土) 高橋雅光一 日本尺八連盟第37回全国尺八コンクール独奏・アンサン
ブル本選会。京都市御池「葆光」ホール審査委員長坂田誠山。審査委員
高橋雅光他4名。
- 21日(日) 松下佳代子：ローマ法王御前演奏記念 報告会&コンサート
【新宿文化センター小ホール】18:45開演：当日券3,500円)

11 月

- 3日(土) 八木宏子、太田恵美子(ピアノ) 第10回「少年ケニア」チャリティ
コンサート出演：マドゥ・ドゥンピア(コラ)ほか 曲目：愛の挨拶
・モーツァルト：ヴァイオリンソナタK.301ほか【調布グリーン
ホール(小) 13:30開演 一般2,500円、学生2,000円】
- 6日(火) 現音アンデパンダン展 ロクリアン正岡作品他
【オペラシティ リサイタルホール】18:30開演 4,000円
- 7日(水) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】
- 11日(日) 松下佳代子：ローマ法王御前演奏記念 アンコール・コンサート
【四谷区民ホール】19:00開演 前売り3,000円/当日券3,500円
- 16日(金) 北川暁子(Pf.)北川靖子(Vn.)クラシックと能楽【出演：友枝雄人(能)
セルリアンタワー能楽堂(澁谷) 19:00開演 全指定席8,000円】
問合せ チケットぴあ 他
- 18日(日) 若い翼によるCMDJコンサート5
【すみだトリフォニー小ホール 16:00開演 3,000円(会員無料)】
- 宮木孝枝(ソプラノ) 中野友裕(ピアノ)
中田喜直：「むこうむこう」(三井ふたばこ 作詞)
ドニゼッティ：<リタ>より「この清潔で愛らしい宿よ」
 - 芹沢妙子(ソプラノ) 山木千絵(ピアノ)
モーツァルト：「静けさは微笑みつつ」K.152(210a)
モーツァルト：「私は行きます、でも何処へ？」K.583
 - 上埜マユミ(ピアノ) リスト：「ハンガリー狂詩曲」第2番嬰ハ短調
 - 浅井隆宏(ピアノ)

- ドビュッシー：前奏曲 第一集より 5. アナカプリの丘、10. 沈める寺 第二集より 12. 花火
5. 齋藤亜理紗 (ソプラノ) 中野友弘 (ピアノ)
チェステイ：「いとしい人の回りに」・アルディーティ：「くちづけ」
6. 杉田聖子 (ソプラノ) 山木千絵 (ピアノ)
バッハ：「あなたがそばに居たら」
モーツァルト：「あなたは忠実な心をお持ちです」
7. 塩川翔子 (ヴァイオリン) 宮崎若菜 (ピアノ)
ラヴェル：ツィガーヌ・演奏会用狂詩曲
8. 深沢亮子/栗栖麻衣子 (ピアノ連弾) フォーレ：組曲 ドリー Op.56
司会：佐藤光政
- 19日(月) 深沢亮子－「翔の会」公開レッスン
【10:00 コトブキD.I.センター 問合せ：大山喬子 044-966-5224】
- 20日(火) 原口摩純－「コンサート&セミナー」【東洋英和女学院大学生涯学習センター 10:40～12:10 講座費 2500円 問い合わせ東洋英和女学院大学 045-922-5513】
- 23日(金) 福地奈津子 (編曲) エレクトーンオーケストラで奏でるフルートとピアノのコンサート【ガーシュイン：ラブソディインブルー他
南大沢文化会館 (八王子市) 15:30 開演 入場料 3,500円】問合せ先：堀之内ミュージックスタジオ 042-676-9326
- 27日(火) 深沢亮子－ 共演：上村文乃 (Cello)
シューマン：アダージオとアレグロ 他【朝日カルチャーセンター 新宿住友ビル7階 13:00 問合せ Tel:03-3344-1945】
- 30日(金) 並木桂子－ピアノデュオブリランテX～名曲で巡るヨーロッパの旅
【出演：並木桂子+岸 洋子・城 みどり+味埜裕子、杉並公会堂小ホール 19:00 開演 全自由席 3,500円 問合せ：デュオブリランテ 03-3729-6877】

12月

- 4日(火) 深沢亮子とその仲間による “ピアノと室内楽の夕べ”
深沢亮子 (Pf.) 恵藤久美子 (Vn.) 安田謙一郎 (Vc.)
【音楽の友ホール 17:00 開演 入場料 4,500円 (会員割引あり)】
(詳細は、裏頁チラシ参照)
- 7日(金) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】
- 15日(土) 室内楽コンサート－シューマン、ドヴォルザーク ピアノ5重奏曲
Pf. 深沢亮子 Vn. 掛橋佑水、井上静香 Va. 中村静香
Vc. 宮坂拓志 主催：(財) 藤沢市芸術文化振興財団
【湘南台文化センター市民シアター16:00 (予定) 問合せ：0466-28-1135】

2013年

1月

- 7日(土) 日本音楽舞踊会議 新年会【詳細未定】
- 25日(金) 声楽部会公演「2013年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」
【開演：18:30 料金：2500円 すみだトリフォニー小ホール】
- 27日(日) 深沢亮子－ 東金文化会館創立25周年記念コンサート
ソロと室内楽 共演：Va. 中村静香、Vc. 上村文乃
【問合せ：東金文化会館 0475-55-6211】
- 27日(日) 原口摩純－ピティナ北横浜ステップにてトークコンサート(横浜市青葉公会堂)

2月

- 7日(木) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】

- 11日(月祝)原口摩純「ランチタイム・コンサート」【名古屋宗次ホール
入場料 1000 円／問合せお申込み:宗次ホール 052265-1715】
- 12日(火) 深沢亮子 共演:城代さや香さん (Va.) と。 曲目未定
【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター 13:00
問合せ:朝日カルチャーセンター tel 03-3344-1945】
- 12日(火) 原口摩純 東洋英和女学院大学「コンサート&レクチャー」
【10:40~12:10 講座費 2500 円 問合せ:東洋英和女学院大学
045-922-5513】
- 18日(月) 動き、舞踊、所作と音楽Ⅱ
【すみだトリフォニー小ホール 出品募集中】

3 月

- 12日(火) 深沢亮子 共演:中村静香さん (Vn.) と。曲目未定
【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター 13:00 問合せ:朝日
カルチャーセンター tel 03-3344-1945】
- 28日(木) 深沢亮子シューベルト幻想曲(連弾) 他共演:草野明子
【19:00 ヤマハ銀座コンサートサロン 問合せ:03-3572-3132 (ヤマ
ハ銀座店)】

4 月

- 1日(月) 原口摩純&石川寛~ソロとデュオのリサイタル~
プログラム:ピアノとヴァイオリンの為のソナタ第1番「雨の歌」他
【東京文化会館小ホール 19:00 開演 一般 3,500 円 日本音楽舞踊会議
後援】
- 5日(金) CMD J フレッシュコンサート 2013
~より豊かな音楽の未来をめざして~
【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演 2,500 円】
《詳細企画中》

5 月

- 23日(木) 深沢亮子 曲目未定 共演 藤井洋子(Cl) H. ミュラー(Va)
【19:00 小金井市民交流センター 問合せ:042-387-7728 (鈴木)】

6 月

- 14日(金) 作曲部会公演【すみだトリフォニーホール小ホール 詳細未定】

7 月

- 5日(金) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」(仮称)
【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】
- 21日(日) 「翔の会」20周年記念コンサート 深沢亮子賛助出演
【浜離宮朝日ホール 13:30】

9 月

- 16日(月) 深沢亮子ー デビュー60周年 連弾と2台のピアノ作品による
共演:野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子 予定
モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品
【浜離宮朝日ホール 14:00 問合せ:03-3561-5012 (新演奏家協会)】
- 26日(木) CMDJ 2013年オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール】詳細
未定

会員スケジュールの表示；

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催（含む、各部会主催）公演予定です。

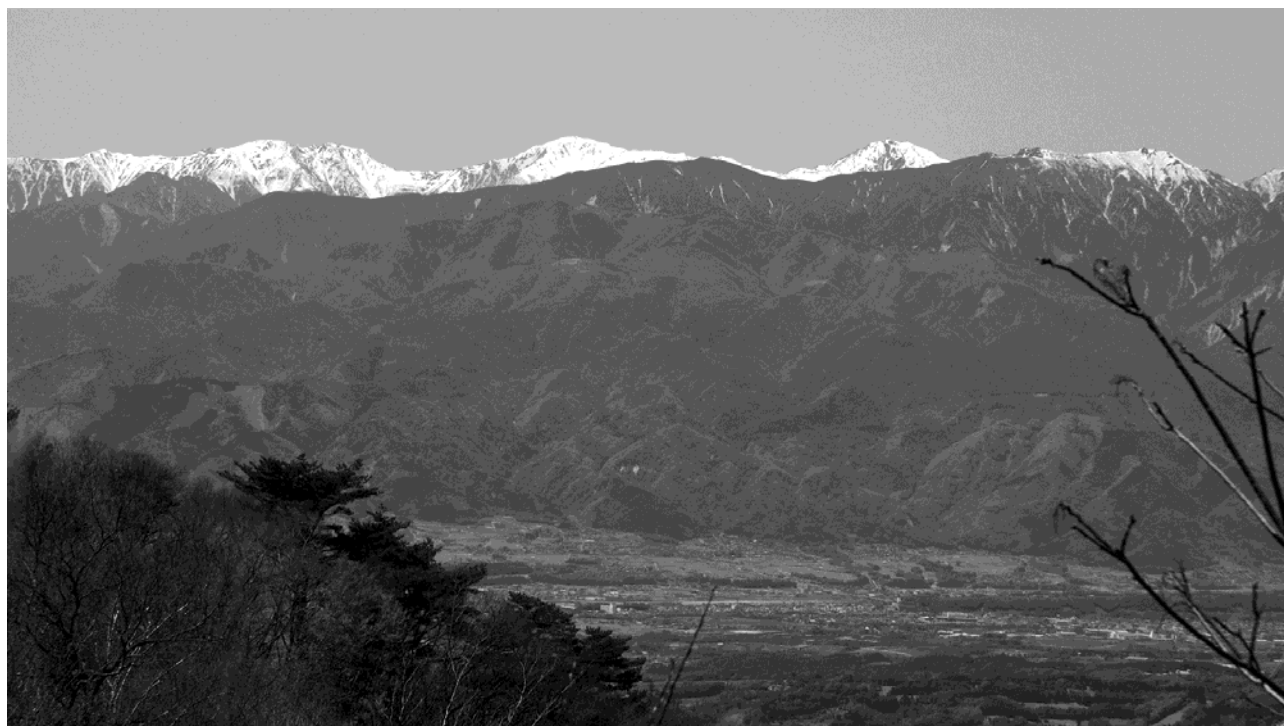
明朝体文字は会員から寄せられた情報、および、会関係者が企画、参加して居る事業の情報です。

明朝体太文字は運営に関わる会議等の予定です。

明朝体の「会員から寄せられた情報」等は長文に過ぎない限り原文そのままを掲載しています。

正会員・準会員・賛助会員の皆様へ

- 上記スケジュール記載の本会主催事業には、会員・準会員・賛助会員・CMDJ友の会の方は会員証呈示で無料または会員割引料金でご入場頂けます。
- 会員の皆様の活動予定を無料掲載させていただきます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。
- お知らせの際は、①〇月〇日（曜日）②会員名 ③催し物(出版物等)名④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演の内容を一つ ⑤【開催場所、開演時間、入場券価格、等】の順番でお書きください。



帯那山中腹から望む南アルプス白峰三山（左から農鳥岳、間ノ岳、北岳）

編集後記

今年は、9月に入ってから残暑が続いておりましたが、「暑さ寒さも彼岸まで」の言い伝え通り、さすがに下旬に入ると秋らしい日が続くようになりました。食欲の秋は、芸術のシーズンでもありますが、その先陣を切って、9月21日（金）には、本会オペラコンサート『愛の表と裏』が開催されました。準備期間が少ない中で若い人達がベテランに支えられつつも、爆発的なパワーを発揮し、とても充実した楽しいコンサートになり、大勢詰めかけたお客様を喜ばせました。続いて10月には『様々な音の風景』、11月には『若い翼のためのCMDJコンサート』と、本会主催のコンサートが続いて開催されます。これらのコンサートのプログラムは本誌に掲載されますので、その記事に目を通した上で、多くの方々が会場へ足をお運び下さることを期待します。食べ物だけでなく、芸術においても「実りの秋」を堪能しようではありませんか。
(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセサター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦

音楽の世界 10月号(通巻 542号)

2012年10月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします